仮面ライダー剣～The earthly World～

龍騎鯖威武

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世は得体の知れないもの、不明瞭なものを「都市伝説」として語り継ぐ。

そのなかに、こんなモノがある。

人知れず、怪人を倒し続ける「青い騎士」。

今回の物語は、その青い騎士が主人公である。

彼の名は…

仮面ライダーブレイド。

目次

登場人物 ―― 1
第1話「都市伝説」 ―― 4
第2話「過去と序章」 ―― 16
第3話「男の本気」 ―― 25
第4話「邪悪なお調子者」 ―― 36
第5話「仕組まれた戦士」 ―― 47
第6話「不死生物の良心」 ―― 57
第7話「精神と心の中で」 ―― 70
第8話「可能性の力」 ―― 83

登場人物

斬崎剣斗＝仮面ライダーブレイド
この物語の主人公。『仮面ライダーブレイドの異世界』の住人。
「ＢＯＡＲＤ」のメンバーで「仮面ライダーブレイド」の適合者。
ルリの力に目をつけた組織の命で彼女を連れ去る。
だが、家族のようなぬくもりを与えてくれたルリに興味が湧き始め、同時に組織のやり方に対して疑問を抱くようになる。
頑固だが常に一生懸命で揺るぎ無い信念を持っている。
ブレイドの力に頼っているためであり、本人の実力はそこそこ。ただ、ブレイドの適合者は彼のみなので、独特な地位を築いている。
幼少時代「金色のブレイド」に救われた過去がある。

浅葱留美奈
『東京アンダーグラウンド』の主人公。
「風の能力」の持ち主。幼い頃から祖父に古流武術（浅葱流剣術）を無理やり教えられていた関係で、能力と武術を取り入れた戦法を使う。
中学時代からケンカが強いことで有名。頭に白いバンダナを鉢巻のように巻いている。
喧嘩っ早い性格であるが、本人はそれを良く思っておらず、何とか正したいと思っている。
公司での戦いの後、ルリと恋仲になっている。

ルリ・サラサ
『東京アンダーグラウンドの世界』の住人。
「公司の象徴」である「生命の巫女」であり、命を吹き込む「反魂の能力」の持ち主。
基本的におっとりした性格だが度胸を見せるときもある。
護衛役であるチェルシーの話から地上に興味を持ち、公司を脱走して留美奈たちと出会った。公司での戦いの後、留美奈と恋仲になって

いる。
　自分のために周りが傷つく事を恐れており、留美奈達が手傷を負うたびに心を痛めている。

　チェルシー・ローレック
『東京アンダーグラウンドの世界』の住人。
「公司の創立メンバー」の一人で「生命の巫女」であるルリの護衛役。自分の信念を曲げない、勝気な性格である。美人でスタイルも良い。突っ走る留美奈にブレーキをかけるのも彼女の役目であり、日々の苦労も絶えない。「重力」の能力の持ち主で、重力波で敵を叩たき潰す戦法を得意とする。

　五十鈴銀之助
『東京アンダーグラウンドの世界』の住人。
　留美奈の幼稚園からの幼馴染み。科学者への道を希望している。いつも度の強いぐるぐるメガネをかけているが、外すと留美奈も知らない美形の顔が現れる。彼には「能力」が無いため、能力が無い者でも水・炎・雷・氷等の力を操る事の出来るメカ「練氣銃」を使って戦う。以前は身体的に留美奈らに比べてはるかに劣っていたが、現在は身体能力で言えば少し劣る程度である。「僕は文化系だよ～」が口癖。

　???＝仮面ライダーカリス
　アンデッドが開放された時期から確認されるようになった「仮面ライダー」を名乗る存在。
　他のアンデッドと敵対しつつも、剣斗や留美奈達を敵視している。

　天王寺賢次郎
『仮面ライダーブレイドの異世界』の住人。
　対アンデッド組織「ＢＯＡＲＤ」を創設し統括する人物で、以前は「生命」について研究をしていた生命学の第一人者。
　感情が無いような雰囲気であり、研究内容に対して命に対する尊厳

を持っていないように見受けられる。
アンデッドの研究中にアンデッドの3分の1が開放され、それに対抗すべく「ライダーシステム」としてブレイド、ギャレン、レンゲルを開発。現時点で実用に至っているのはブレイドのみ。
不死のアンデッドに対し、死者を生き返らせることが可能な「反魂の能力」を持ったルリを研究対象として、剣斗に捕獲命令を出す（捕獲理由は「アンデッドの可能性があるから」と偽った）。
アンデッドの研究中、量産に成功した機械怪人「メカローチ」を従えている。

黒ずくめの青年
どこか陰のある雰囲気で、神出鬼没。時折、剣斗達の前に現れて意味深な言葉や、真実に導くような言葉を残す。

第1話「都市伝説」

子どもの頃から、ヒーローに憧れてた。
幼いころ、助けてくれた金色の騎士。
あの憧れは、今も忘れない。
そして、今。
おれは騎士となった。
でもまだ…
ヒーローにはなりきれない…。

夜の街…。
ドシャッ…!
一人の異形が地面に倒れ伏した。その異形は消えることも爆散することもなく、ただ地面に横たわっている。
ただ、ベルトのバックルが二つに割れた。
傍らに居るのは、青いスーツを纏った戦士。
名を「仮面ライダーブレイド」という。
彼はゆっくりとカードを翳し、その異形に投げた。カードが刺さった途端、吸い込まれるように異形は消える。

これは「封印」と呼ばれ、死という概念のない存在「アンデッド」が、活動を停止する唯一の方法である。
鎖が描かれていたカードには、動物の絵に変化していた。アンデッドはカードに封印されたのだ。
耳に手を当て、通信する。
「本部へ通達。カテゴリー４のアンデッドの封印に成功。これより帰還します」
そう言って、ブレイドは腰にあるベルト「ブレイバックル」を外し、変身を解除する。
中から現れたのは、険しい表情の青年。
「斬崎剣斗」
彼が、この物語の主人公となる。
剣斗は近くにとめていたバイク「ブルースペイダー」に跨り、アクセルを回しエンジンを轟かせながら、その場を走り去った。

この世界では、さまざまな都市伝説が噂として流れている。
幽霊、未確認生物、謎の組織、有名な企業の裏。
中には、こんな都市伝説もある。
人知れず、怪物を倒すために戦う、青い騎士。
ある高校生「浅葱留美奈」も、その都市伝説は耳にしていた。
人々の中で、その噂「青い騎士」はかなり流行しているようだ。
「なぁ、銀之助」
「なに？」
近くに居たグルグル眼鏡をかけた友人に声をかけた。
彼の名は「五十鈴銀之助」。
「青い騎士って…おまえも知ってるか？」
「知ってるよ。とても有名じゃないか。この前、クラスの誰かが見たって話も聞くよ」
青い騎士の噂が持ちきりなのは、目撃例が多いからなのだろうか…。
実際この学校内でも、かなりの目撃例があるようで、学校側から生

徒にはあまり関わらないようにと釘をさしているくらいだ。
「まぁ…僕は関わるつもりは無いよ。青い騎士が現れるのは、怪物を退治するとき。危ないし、もしかしたら青い騎士も危険かもしれないから」
「おまえだって、十分強くなっただろ。そんなに危ない危ないっておびえる必要は無いんじゃないのか？」
２人は、半年前に人生で経験できないような戦いに巻き込まれた。だから、留美奈は銀之助が警戒する理由が分からないのだ。
「一応、僕は文化系だよ…。それに留美奈も危険な目にあって、ルリさんを悲しませたら駄目だからね」
「分かってるよ。もう、あいつには悲しい想いをして欲しくない」
その戦いの果てに取り戻した大切な人。
留美奈は彼女を絶対に守り抜いてみせると決意したのだ。

同時刻。
「ＢＯＡＲＤ」の一室。
そこでは、一人の初老の男が立派な椅子に座っている。
「天王寺賢次郎」。このＢＯＡＲＤを総括する男である。
彼の目の前には剣斗もいる。
「カテゴリー４・ボアアンデッドの封印、ご苦労だった。仮面ライダーになってまだ２ヶ月なのに、素晴らしい働きぶりだよ」
「お褒めに預かり、光栄です」
軽く会釈する剣斗。机には前夜に封印したカテゴリー４の「ボアタックル」のカードがある。天王寺はそれを確認し剣斗に返す。
「スペードスートのカードは、ブレイドである君が使う事で真価を発揮する。これからもスペードスートのカードは封印の報告だけで渡す必要は無いよ」
そう言って、今まで封印したリザードスラッシュ、ライオンビートのカードも渡された。
これにより、現時点でブレイドの持つスペードスートのカードは５枚となった。

「クラブとハートのカテゴリーAは、未だ発見できていない。すぐさま発見を急ぎたいところだが、カテゴリーAは上級アンデッドと同等。なかなか尻尾は見せない」
「では、他のライダーシステムもまだ…？」
　実は、ライダーシステムはブレイドだけではない。まだ見ぬ二人の仮面ライダーのシステムが企画されている。
「ギャレンは資格者がおらず、レンゲルは資格者が居るもののシステムも未完成でカードも無い。新たなライダーの投入は暫し先になる。その時期が早まるかどうかも、君の活躍がかかっている。頼むよ」
「任せてください。クラブとハートのカテゴリーAも必ず」
　彼の決意を聞いて、微笑んだ天王寺は次に険しい表情になる。
「早速だが、次の仕事だ」
「新たなアンデッドですか？」
「その可能性がある者だ」
　そう言って写真を見せられた。
　写真には、剣斗より2歳ほど年下と思われる少年と少女が笑っている。
　中心が少女であることから、この少女がターゲットらしい。
「上級アンデッドだ。カテゴリーJQKのアンデッドは人に擬態している。この少女も…おそらくはカテゴリーQ。「ルリ・サラサ」と名乗り人間界に溶け込んでいる。人と関わっているとなると、その少年への危険も考えられる。早々に捕獲してもらいたい」
「捕獲…？」
　封印ではなく、捕獲というワードが出てきたのは以外だった。
「上級アンデッドを封印するのは難しい。捕獲に留め、本部内で改めて封印する。困難な仕事だが、やってもらえるか？」
　そう言われ、写真を受け取った剣斗。
「…最善を尽くします」
　その日の夕方。
「ただいまー！」
　留美奈は家に帰り着く。そこから出迎えてくれたのは…。

「おかえりなさい、留美奈さん！」
この家に居候している少女「ルリ・サラサ」である。
「チェルシーは？」
「今は、お買い物に出かけてます。わたしも行こうとしたんですけど、危ないから家で留守番していて欲しいって言われて…」
どうやら、彼女の付き人「チェルシー・ローレック」も、青い騎士関連の都市伝説を知り、ルリの身を案じているようだ。
「みんなして危ない危ないって…ルリはおれが守るから、大丈夫だ！」
「でも、わたしも危ない事には関わりたくないですし、留美奈さんも関わらないでくださいね」
ルリは、周りの人々の安全を願い、この都市伝説も危険視しているのだ。
「…それなら、チェルシーのやつを迎えに行くか。一人だけじゃ、心配だしな！」
「そうですね、３人なら大丈夫です！」
そう言って家を出て、チェルシーのいるスーパーまで彼女を迎えに行く事にした。
歩いて１０分ほどだろうか。
いままで、ときどきすれ違う人々がいたが、壁に寄りかかっている青年。
見た事もない人であり、近隣の住民ではないようだ。
だが、２人は特に気にも留めず、通り過ぎようとした。
「ルリ・サラサだな？」
ふと、声をかけられた。かなり敵意を持った声である。
「はい、そうですけど…」
「一緒に来てもらう」
そう言って、近づいてくる。
「だれだ、おまえ？ルリに何のようだ!?」
留美奈は警戒心を持って聞く。
「その少年から離れろ！人間界に溶け込ませるつもりはない！」
「きゃっ!?」

突如、青年…剣斗は、ルリから留美奈を引き剥がし、留美奈を守るように立ちふさがる。
「何すんだ！おまえ…公司の回し者か!?」
「公司…？何を言って…！」
留美奈は剣斗の背中を突き飛ばし、持っていた木刀を構える。
彼には「風」の能力がある。木刀に風を纏い、戦闘体勢に移った。
「それは…おまえも上級アンデッドか!?」
「アンデッド…？」
聞きなれない言葉に戸惑う2人をよそに、剣斗はブレイバックルを取り出す。
スペードのカテゴリーAを挿入して腰に当てた途端、赤いベルトが巻きついた。
「正体を現してからにするつもりだったが…この状況ならば止むをえん」
「なんだよ…!?」
「変身！」
〈TURN―UP〉
ベルトのレバーを引くと、青いエネルギー上の壁「オリハルコンエレメント」が現れ、それを潜り抜ける。
すると、彼の姿は仮面ライダーブレイドへと変化した。
「青い騎士…！」
「おおおおおおおおおおおおおぉっ！」
ブレイラウザーを振りかざし、留美奈に振り下ろす。
ズバァッ!!
木刀は一瞬にして真っ二つになってしまった。風の力をものともしていない。
「くそ…！」
丸腰状態の留美奈。ルリがとっさに彼の前に立ちふさがる。
「やめてください！」
「黙れ！アンデッドの言葉になど流されない!!」
なおも敵意を持って、ブレイラウザーを向けるブレイド。

そこへ…。
「はあああああああぁっ!!」
ドガアアアアアアアアァッ!!
「ぐううっ!?」
突如、強い衝撃を腹部に感じ、ブレイドは数歩後ずさりをしてしまった。
「ルリ様！お怪我は!?」
「大丈夫です！」
チェルシーが駆けつけたのだ。
「ちぃっ…まだ居るのか!?」
彼女の到着に対して、ブレイドは苛立ちながら立ち上がる。
「上級アンデッドは集合するタイプだというのか…？」
今まで、アンデッド同士が複数いる姿は見受けられなかった。
さすがに疑問が残る。
だが、先の攻撃も風を纏った木刀も、人間の成せる業ではない。
「あんた…噂の青い騎士だな？ルリ様に何の用だ!?」
「その少女はアンデッドだ！人々の危険を取り除くため、捕獲する！」
どうやら、ブレイドはルリをアンデッドと思い込んでいるようだ。
「勘違いだ！ルリ様はアンデッドなどではない！」
「騙されるか！おまえ達も人間とは思えない力を備えている！正体を現せ！」
ブンッ!!
説得にも応じず、ブレイドはブレイラウザーを振り回す。
「話は聞いてくれそうにも無いね…。留美奈！」
「すまん、木刀が無いんだ！」
指差す先には、さきほどブレイドが真っ二つに切り落とした木刀が転がっている。
「役立たず！」
「なんだと!?」
「なにをごちゃごちゃ言っているんだっ!!」
無駄話をしている二人に怒りを感じ、ブレイドは更に力を込めてブ

レイラウザーを振りかざす。
「やべっ!?」
とっさに避ける2人。
「くそ…何故、怪人態にならないんだ!?」
ブレイド自身、人間を傷つけるという事にはやはり抵抗がある。この3人はまったく灰燼の姿を現さない。それが腹立たしかった。
「だから、おれ達はアンデッドって奴じゃないんだよ!」
「じゃあ、その力は何だ!?人間業じゃないだろう!?」
ブレイドの中では、人間で話しえない異常なものはアンデッドか仮面ライダーのどちらかしかない。つまり、仮面ライダーではない彼らはアンデッドとしか見れないのだ。
だが…。
彼の心に何かが引っかかる。
「アンデッド…」
目の前の3人は人間そのものだ。まるで怪人とは思えないほど再現できている。
そこへ…。
「キイイイイイイィッ!」
「っ!?」
突如、鹿のようなアンデッドが現れた。
「ふんっ!!」
ザンッ!!
「ギャアアァッ!!」
とっさに避けつつ、アンデッドに攻撃を加えた。
「なんだよ、こいつ!?」「もしかして、これが…アンデッド…?」
留美奈達は、目の前の怪物を見てうろたえる。
以前の戦いでも、このような怪物を見る事はなかった。
「この種類は…」
一方のブレイドには、この怪物に見覚えがある。
以前、BOARDから逃げ出したアンデッド達の目撃情報や封印前の姿の予想図。

そのなかに、これと全く同じ形のアンデッドが居た。
「スペードスートのカテゴリー6だな…！」
そう、ディアーアンデッドである。
「…おまえらは下がってろ！こいつはおれが封印する！」
ブレイドは留美奈たちを背後に押しやり、ディアーに向かって走り始めた。
なぜ、こいつらを庇うような事を…？
そんな疑問を心に抱えて。
「うおおおおおおおおおおおぉっ!!!」
〈ＳＬＡＳＨ〉
ラウズカードにあるリザードスラッシュのカードをブレイラウザーにラウズし、切れ味を高め、攻撃を再開した。
「はあああああぁっ!!!」
ズバアアアァッ!!
「ギエエエェッ！」
有効な一撃だったようだ。だが、ディアーも黙っているわけではない。
「ガアアアアアアァッ!!」
バリイイイィッ!!
「おおおぉっ!?」
角から発せられる雷のエネルギーをブレイドにぶつける。
その威力の前に、ブレイドは地面を転がった。
「くそがぁっ…！」
〈ＴＡＣＫＬＥ〉
突進の威力を高めるボアタックルのカードをラウズし、反撃に臨む。
「らあああああああああああああああああぁっ!!!」
ドガアアアアアアアァッ!!
「オゴオオオオォ!?」
双剣で防ごうとするが、ブレイドのタックルの威力が上だった。
武器を失い、地面に這い蹲るディアー。

「トドメだ…！」
〈ＫＩＣＫ〉
　続いて、ローカストキックのカードをラウズし、キック力を高める。
「はあああああああああああああっ…!!」
　ブレイラウザーを地面に突き刺し、準備を整える。
　そして土をけり、空中高く飛ぶ。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」
　ドガアアアアアアアアアアアアッ!!!
「ガアアアアアアアアッ!?」
　赤く輝く右足が、ディアーの体を貫き、ブレイドは美しい動きで地面に着地し、対するディアーは地面に倒れ付した。
「グ…ガ…ァ…」
　ベルトのアンデッドバックルが開く。
「…っ！」
　ラウズカードのアンデッドが封印されていない「プロパーブランク」のカードを翳し、ディアーに向けて投げた。
　その瞬間、ディアーは前夜のボアと同じように吸い込まれるように消えていった。
　戻ってきたラウズカードの絵を確認し、ブレイラウザーにしまうブレイド。
　ひと時の沈黙が流れる。
　そして、ブレイドは留美奈達を睨んだ。
「…！」
　攻撃を予想し、身構える３人。
　そこに…。
「グルルルルルルルルルルッ！」
　５対ほどの鈍い銀に輝く怪人が現れる。これはＢＯＡＲＤが操る怪人「メカローチ」である。
　ドンッ！
「うっ!?」「くっ！」

メカローチは、留美奈とチェルシーを押しのけて、ルリを掴む。
「いやっ！」
必死に抵抗するが、非力な少女の力では、メカローチの怪力には敵わない。
「ルリっ！」「ルリ様っ!!」
彼女を取り戻そうと、メカローチに向かって走るが、目の前にブレイドが立ちふさがる。
「本部の指示により、ルリ・サラサは捕獲する」
そういうと、メカローチたちは夜の闇に消えていった。
ブレイドはブレイバックルを操作して変身を解除する。
「…もし、ルリ・サラサがアンデッドではないという結果が出れば、すぐに解放する事を約束する。だがもし、そうでなければ…彼女もおまえ達もすぐに封印する！」
剣斗は強く言い放ち、ブルースペイダーに跨ってメカローチの後を追った。
「待てっ！」
留美奈とチェルシーは後を追おうとするが、その姿はどこにも見えなくなっていた。

それを遠くから見ていた黒い影。
「…地下世界の人間も関わり始めたか…」
そう呟いて踵を返し、去っていった。

続く…。

次回！

何なんだ…？
じゃあ、お話します。

おまえ達は…

そんなことの
カテゴリー8
ハートのライ

ために、命を賭けたのか…!?
ギャレンの資格者が…見つかったぞ
…ハートスートか!?
そいつはおれの獲物だ
ダー…だと!?

第2話「過去と序章」

今、その力が全開する…。

第2話「過去と序章」

ＢＯＡＲＤに戻ってきた剣斗。天王寺に報告しに向かった。
「報告いたします」
「あぁ、分かってるよ。ご苦労だった。封印は後日行う。それまでの間、彼女は監視下に置くから、君に頼んでおこう」
「了解いたしました」
軽く会釈をして、部屋を出て行く。
向かった先は、ルリを監禁している部屋だ。といっても、閉じ込めているのみで身を拘束しているわけではない。
パスコードを入力し、部屋に入る。
そこには大人しく椅子に座っているルリが居た。
「もういいだろう？正体を現せ」
「わたしは…アンデッドじゃありません…！」
涙声で剣斗に反論するも、彼はルリの言葉を信頼しない。
「ならば、ＢＯＡＲＤがおまえに目をつけるはずが無い。アンデッドの封印だけを目的として活動するのがＢＯＡＲＤだからな」
そう言って、剣斗はブレイバックルを見つめる。
「それって…何なんですか？」
「…知ったところでどうする？」
彼女の質問や言葉がいつ、自分を惑わせるか分かったものではない。基本的に答えるつもりは無かった。
「じゃあ…わたしから、いろいろお話します」
ルリは自分から何か聞いても彼は答えてくれないと確信していた。だから、自分のことから説明を始める事にした。それからならば信じてもらえるかもしれない。
「…勝手にしろ」
剣斗は、聞き入るつもりも無くそっぽを向き続けた。
「えええええええ!?ルリさんが!?」

銀之助は大声を上げた。
「だから青い騎士には関わるなって…!!」
「あいつから襲い掛かってきたんだ!とにかく、早くルリを助けないと…!」
家に置いていた、あの刀を手にする。
その名は「小鳥丸」。
半年前の戦いで、ずっと愛用していた自分の家に伝わる刀。これがルリを救う鍵になったといっても過言ではない。
今回もルリを救うため、使うのだ。
「わたしもあんたも…またルリ様をお守りできなかった…!」
チェルシーは悔しそうに拳を握る。
「悔しがってる暇があったら、ルリを助けに行くぞ!早くしろ!」
留美奈に急かされるチェルシー。だが、銀之助が止まる。
「でも青い騎士は、何者でどこから来たのかも分からない。唯一の手がかりはアンデッドという怪人を倒しているという事だけだよ…」
たしかに、あの青い騎士の素性はさっぱり分からない。
都市伝説として扱われているだけあって、用心深いという事なのだろうか…。
「だからって、じっとしていられるかよ!いくぞ!」
銀之助の言葉も、留美奈には止める理由にならない。結局、彼らは家を飛び出し、ルリを助けるために行動を開始した。

同時刻。
〈CHANGE〉
どこからか音が聞こえ、一つの影が形を変える。
赤い一つ目に、黒い身体、弓のような武器を手にしている。
「ウ…ウゥ…!?」
彼が対峙しているアンデッド。蛾のような見た目をしている。
それは先ほどまで自身の本能に赴くまま、彼を殺そうとしていたが、その姿を見て驚愕しているのだ。
「どうした?先ほどまでの殺意がないぞ」

半ば嘲笑しているような言い方だった。黒い影はゆっくりと「モスアンデッド」に近づこうとしている。
「驚いたか?……この俺が「カリス」だということに」
カリス。
そう名乗った影は、一気に走り始め、モスに近づく。
「ヌアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」
ズバアアアアッ!!
「ギャアアアアアッ!?」
手にあった弓「カリスアロー」を使い、カリスはモスを切り裂いた。
その威力は絶大であり、モスは胸を押さえて苦しみ続ける。
「さぁ…俺の力になれ」
そう言って、ラウズカードを翳す。
命の危機を感じたモスは…。
「ギシイイイイイイイイィッ!」
必死に逃げ出す。カリスは駆け足で彼を追っていくが、相手は飛行能力を兼ね備えている。その手段を持ち得ないカリスに、モスの追跡は不可能だった。
「逃げたか…次は必ず!!」

ルリは一呼吸おいて、語り始めた。
「わたしは元々、地下の世界…「アンダーグラウンド」にいた者です」
「地下世界…!?」
剣斗はハッとして、ルリを見つめる。
「おまえが…地下世界の人間!?」
「はい。そこで「命の巫女」と呼ばれ、地下世界の組織「公司」の象徴たる存在とされてきました」
彼女の言葉に剣斗は心当たりがあった。
地下世界…。
剣斗のある友人は政府の要人であり、つい最近、その地下世界を調査するために向かったという話を聞いていた。
だがそれは、剣斗以外は政府関係かこの社会の上層部しか知らない

はず。彼女が言っている事が本当でない限り、知っているはずが無いのだ。
「そうか…」
「信じてくれますか…？」
　ルリが問うと、剣斗はハッとして頭を振る。
「い、いや…それだけでは…！」
「お花畑が見たい。そんなお願いのためだけに、留美奈さん、チェルシー、銀之助さんが戦ってくれました。だからわたしは、そんなお願いをかなえてくれた人たちと、ずっと一緒に居たかったんです」
　ルリは少しだけ微笑んで話す。
「花を見るために、命を賭けた戦いに赴いたというのか…？」
「そうです。みんな、本当に誠実で優しくて…。そんなみんなが、大好きです」
　その瞳に一切の疑いも感じられなかった。
　この少女は…人間と寸分違いは無い。仮にアンデッドだとしても、彼女は何か違う気がする…。
　剣斗は立ち上がる。
「あの…？」
「…これはブレイバックル。このおれ、斬崎剣斗を仮面ライダーブレイドへと変身させるモノだ」
「仮面ライダーブレイド…」
　名前を復唱したときに、気がついた。
「…教えてくれるんですか？」
「気まぐれだ。知ったところで、何も変わらないからな」
　そう言って、自分の身の上を語ろうとしたところで、通信機が鳴る。
「はい」
『斬崎君、アンデッドが出現した。封印に向かってもらいたい。方位東北、６キロの位置に反応がある』
「了解しました。すぐに向かいます」
　通信機を直し、ルリを見つめる。
「…ここで待っていろ。アンデッドが封印でき次第、理事長におまえ

の解放を持ちかけてみる」
ブレイバックルを握り締め、部屋を出て行った。
「キシィ…!!」
ブルースペイダーで向かった先には、モスが森の中を徘徊していた。
「ハートのカテゴリー８か…」
ブレイバックルを腰に装着し、チェンジビートルをセットする。
「早々に封印する…変身!!」
〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
オリハルコンエレメントをブルースペイダーごと潜り抜け、仮面ライダーブレイドへと変身した。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおぉっ!!!!」
ドガアアアアアアァッ!!!!
「ギャアアァッ!!」
ブルースペイダーの突進により、モスは吹き飛ばされる。
「キイイィィッ!!」
しかし、そのダメージもなんとか耐え忍び、空中へと飛翔する。
「逃げる気か!?」
ブレイドは再び、ブルースペイダーのエンジンを轟かせ、モスに体当たりしようとするが、相手は空を自在に滑空できる。攻撃は当たらない。
「ならば…!!」
〈ＴＨＵＮＤＥＲ〉
新たなカード、ディアーサンダーの力を使い、ブレイラウザーに電撃の力を込める。
「はあああああああああぁっ!!」
バリイイィィッ！
「ガアアアァッ!?」
雷の速度はモスの反応で避けられるものではなく、彼の翼を焼ききり、地面に叩きつけた。これで逃げることは出来ないだろう。

〈ＢＥＡＴ〉
「うおおおおおおおおぉっ!!」
ドガアアアアアアアアァッ!!
「ギエエェッ!?」
続けざまにライオンビートのパンチ力を高める技を使用し、モスは吹き飛ばされる。
勝機を感じた。
そこに…。
〈ＢＩＯ〉
「何!?」
突如、蔦のようなものがモスを絡めとり、一人の影のところまで引きずった。
その影は…。
「あれは…ハートの…!?」
そう、カリスである。
〈ＣＨＯＰ〉〈ＴＯＲＮＡＤＥ〉〈ＳＰＩＮＩＮＧ　ＷＡＶＥ〉
カリスラウザーに２枚のカードをラウズし、右手に風のエネルギーを蓄える。
「ツアアアアアアアアアアァッ!!!」
ドシュッ!!!
その手刀はモスの体を貫き、モスは地面に倒れ伏した。
「ギ…ギィ…!」
「これで１０枚目…」
プロパーブランクのラウズカードを取り出し、モスに投げる。
封印されたカードはカリスの手に収まり、それを確認すると去っていく。
「待て!おまえは誰だ!?」
「…仮面ライダーカリス…そう名乗っておこう」
少しだけ振り向きそう答えると、すぐさま姿を消した。
呆然と立ち尽くしていたブレイド。
そこに…。

「見つけたぞ、青い騎士！」
留美奈が現れた。チェルシーや銀之助は手分けしているために、ここには居ない。
「…浅葱留美奈だったな。ルリ・サラサの件だが、彼女はアンデッドではないとおれは判断した。ＢＯＡＲＤに解放を持ちかけるつもりだ」
意外な言葉だったが、留美奈は未だ警戒心を消さない。
「警戒するな。何なら、ついて来い。彼女の場所まで案内してやろう」
ブルースペイダーに跨り、後ろを指差す。
「…どうして、急に信じようとしたんだ？」
「不思議なモノだ」
留美奈の質問に、ブレイドはエンジンを吹かしながら答える。
「…じゃあ、おれも信じる」
その言葉を留美奈は信じ、ブルースペイダーに跨った。

ＢＯＡＲＤに到着し、天王寺のいる部屋まで行こうとするが…。
扉越しに声が聞こえた。
「…命の巫女たる少女…私の研究に相応しい…」
「そういうことか…！」
剣斗は小さく呟く。留美奈は一気に扉を開けようとするが…。
「待て。今、ヤツに疑われれば厄介な事になる。ここは…俺に任せろ」

少し時間を置き、扉をノックする。
「入ります」
部屋に入ると、やはり天王寺が立派な椅子に座っている。
「モスアンデッドは？」
「…仮面ライダーカリスを名乗る者に封印されました。モスアンデッドの活動自体は止まりましたので、危険はありません」
「カリス…」
天王寺は何かを知っているようだったが、それよりもたずねる事があった。
「理事長。ルリ・サラサの件ですが…彼女はアンデッドという証拠も

得られず、血液も赤い。解放するべきだと考えていますが…」
「心配する事はない。始めから彼女がアンデッドではないことは知っている」
どうやら、隠すつもりは無いようだ。
「やはり…貴方は自分の研究のために…！」
「そう。彼女の持つ、反魂の力は興味深い。我ら人類の更なる革新のために、必要な実験材料だ」
天王寺はブレイドと似たバックル「ギャレンバックル」を撫でる。
「そうだ、レンゲルシステムも完成した。ギャレンの資格者を君に探してもらおうか？」
「話を逸らすな!!おれがその気になれば…!!」
ブレイバックルを構える。殺人はするつもりでないが、状況によっては生身の人間への暴挙に走る可能性もある。
「だが…アンデッドを封印する人手不足は、君も感じているはず。さあ、もって行きたまえ」
ギャレンバックルを投げ、剣斗はそれを受け止めた。
「そうそう、ルリ・サラサも解放して構わない。いつでも捕らえられるからね」
なぜか、せっかく手に入れた貴重な存在を野放しにするようなことを簡単に言う。剣斗はいぶかしげに天王寺を見つめていたが…。
「…いくぞ、浅葱留美奈！」
扉越しに伝え、すぐに部屋を出て行った。
残された天王寺は…。
「カリスか…。近いうちに「レンゲル」と「ニュージェネレーションズ」を投入しなければな」
金庫を開けると、似た形をした４つのバックルが並べられてあった。
その後、剣斗と留美奈はルリを助け出し、ＢＯＡＲＤを去った。
これが…この物語の序章になる。

続く…。

次回

おまえがギャレンだ。

クラブのカテゴリーAか…！

カリスって…何者なんだ…？

でぇぇっかくてイカした男が今…帰ってきたぜ!!

変身!!

第3話「男の本気」

今、その力が全開する…。

第3話「男の本気」

ルリが留美奈の家に無事帰され、２日が過ぎた。
剣斗は仮面ライダーやアンデッド、ＢＯＡＲＤのことを説明した。
「…現時点で残ってるアンデッドは、３分の１くらいだ。うちの上級アンデッドは、詳細不明のハート以外は、スペードとダイヤがそれぞれＪとＫ、クラブがＱとＫが解放されている。スペードとダイヤのカテゴリーＱは、おれが所持している。クラブのカテゴリＪは、レンゲルの資格者候補である、おれの先輩が持ってるんだが…」
そう言って見せたのは「アブゾーブカプリコーン」「アブゾーブサーペント」の二枚。そして、机の上にはブレイバックルとギャレンバックルがあった。
「兎も角、ギャレンの資格者を見つけたい。協力してくれ」
「どうやって見つけるんですか？」
銀之助の言葉で、剣斗はギャレンバックルを手に取る。
「仮面ライダーに変身できる人物は、アンデッドとの融合係数が高い者が当てはまる。それを計測するには…変身してもらうしかない」
つまり、やってみなければわからないということだ。ＢＯＡＲＤを裏切ってしまったような事をした今、あの組織を利用する事も出来ないだろう。
だが留美奈達にとって、
「もし、変身してみて、融合係数が低かったら…？」
「まぁ…おれの先輩は、ブレイドのオリハルコンエレメントに弾き飛ばされただけだった。基本的には弾き飛ばされるだけだが、酷いときは…」
「体の一部を失った人もいる」
「「「!?」」」
剣斗以外の４人は驚愕した。下手をしたら、体の一部を失うなどとんでもない。これからの戦いや生活に支障が出るし、なにより恐ろしい。

「おまえ達の中で、それでもやれるってヤツはいるか？」
全員、顔を見合わせる。実際、留美奈やチェルシーは戦う事は出来るため、これをしなくとも平気かもしれないが、仮面ライダーの力を得られるならば、貴重な戦力になれる。
しかし、失敗すれば取り返しのつかない事になる。
その覚悟は…。
「わたし、やってみます…！」
ルリにあった。
「ルリ様！どれだけ危険か、ご理解していますか!?下手をすれば、とんでもない事になるんですよ!?」
「分かってます！でも…いつもわたしは守ってもらってばかり…。だから…！」
剣斗は黙って、それを聞いていた。
「ずっと…助けてもらったり、守ってもらったりしているだけじゃ…。みんなが傷つくのに、いつもわたしだけ黙ってみているだけなんて…！」
「ルリ…」
彼女のために、留美奈たちは傷ついたりした。もう、こんな思いはしたくない。だから彼らと共に戦いたい。
「苦しみを共有すれば良いのか？」
「え…？」
「確かに、自分だけ何も出来ないもどかしさというのは分かる。仮にギャレンになって、こいつらと一緒に傷つけば、それで満足か？」
剣斗には、彼女の決意は傷の舐めあいを求めているように感じられた。共にいるが、それを共有できない事の孤独。そう感じ取れた。
「そんなことはっ！」
「その決意が本当かどうか…自分で確かめろ」
ルリの前にギャレンバックルを置き、彼女の反応を伺う。
ゆっくりとだが右手を伸ばし、ギャレンバックルを握り締める。
外に出て、ルリはギャレンバックルを構える。

隣にいる剣斗がダイヤのカテゴリーA「チェンジスタッグ」を手渡した。
「使い方はブレイドとなんら変わらない。そのカードをギャレンバックルに装着して、腰に当てろ」
「はい…！」
ルリは言われたとおりの動作を行い、腰にベルトを作り出した。
留美奈が、彼女の両肩を持つ。
「ルリ…本当に大丈夫か？」
「…大丈夫です」
僅かながら声は震えていたが、力強さはあった。
留美奈は頷くと、彼女からゆっくりと離れる。
「…変身!!」
〈TURN―UP〉
バックルが青く光り輝き、オリハルコンエレメントが現れ、ゆっくりとルリに向かっていく。
彼女は両手を上げ、それを待つ。…だが、震えていた。
「…っ！」
「バカが…！」
ドンッ！
ふと、彼女が目を閉じて顔を背けた瞬間、剣斗は彼女を突き飛ばし、オリハルコンエレメントを受け止めた。
バリイイィッ!!
「ぐあああああああぁっ!?」
その衝撃で剣斗は吹き飛び、地面を転がった。
「剣斗さん!?」「おい、剣斗！しっかりしろ！」
全員は不安そうに近寄り、剣斗を揺する。彼の体は失われておらず、安堵はあった。
「う…くぅ…」
腕を庇いながら剣斗は目を覚まして立ち上がり、ルリを睨んだ。
彼女は先ほどのことを思い出し、目を伏せた。
「オリハルコンエレメントを潜らなければ、ギャレンにはなれない。

それに怯えてるようじゃ、戦ったとしても負けは確実だ」
剣斗は、ルリが一瞬でもオリハルコンエレメントから目を背けるならば、中断させるつもりだった。それに目を背けるようならば、戦いの覚悟など不十分だ。
「虚勢を張るな。生きて戦う気が無いなら、せめてその身を大事にしろ」
そう言って、剣斗は踵を返す。
彼の視線から解放されたルリは、地面にひざを折って崩れ落ちた。
「ルリ様！」「ルリ！」
留美奈達が彼女を支えると、彼女が泣いていることに気がついた。
「ごめんなさい…やっぱり…怖かったです…」
「怖くて良いんだ！おまえは戦わなくていい！」「わたし達は、貴女が戦わないために戦っているんです」
彼女の罪悪感を取り去るべく、優しく諭すが、彼女はずっと泣き続けていた。
そして、それを少し離れた場所で見ている剣斗と銀之助。
「剣斗さん、やっぱり…言い過ぎたんじゃ…」
「生ぬるい言葉を言って、取り返しのつかない事にしたいか？」
「い、いや…そんなことは…」
銀之助も、剣斗の睨みに怯え口ごもってしまった。

そのころ、町で一体のアンデッドが暴れていた。
「ツウウウッ!!」
蜘蛛のような姿、緑の体に紫の瞳。スパイダーアンデッドだ。
彼は口から大量の子蜘蛛を吐き、人間を襲っている。
「ヌオオオオオオオオォッ!!」
「＊＃＄＆？＃％〃…スパイダー」
不意に聞こえた謎の声。
振り返ると…カリスが立っている。
「％＄〃＃@〉。…カリス？＋^」
「＋＊〃＆％＊？〈△×」

互いに人間の知る由もない言語を喋っている。アンデッド同士で交わされている言語であるのだろう。
「{@！＆：／・}［―；※：。＄＆％〈…レンゲル」
「レンゲル…？」
彼らの会話で聞き取れるのは、カリスとレンゲルという言葉だけである。
スパイダーはレンゲルという言葉を聞き、首をかしげる。
その様子を見て、カリスは踵を返して姿を消した。
「レンゲル…」
スパイダーは、カリスの残していていった言葉を復唱し、ある考えが浮かんだ。

ふと、テレビで流れた臨時速報を見て、剣斗はブルースペイダーに乗る。
「アンデッドか!?」
留美奈も彼に近づいてきた。小鳥丸を左手に抱えて。
「来るか?さっきの報道を見たところ、今回のアンデッドは、今までよりも手強いぞ」
「そんなことで怖気づけるかよ！ルリを守らなくちゃいけないんだ…！」
「二人だけで抜け駆けは許さんぞ！」
今までのように戦う際の服装に身をまとったチェルシーも集まる。
「覚悟は良いか？」
剣斗の問いに二人は頷く。
「行くぞ！」

「ちょ～っとまったぁ！」

ふと、快活な男の声が聞こえた。
声の下方向を向くと、留美奈の家の屋根に、多くの荷物を抱えた男が立っていた。

「なに…？」「どうしたんですか…!?」
ルリと銀之助もその声に導かれて、外に出てきた。
「とうっ！」
男は大量の荷物を抱えているとは思えない身軽な動きで屋根を跳び、地面に着地する。
「でぇ～っかくてイカした色男が今…帰ってきたぜぇっ！」
アロハシャツにサングラス、カウボーイハットと常夏の土地を旅したような風貌だ。
「ノゾムさん!?」
「久しいな剣斗！寂しかっただろ？隠すな。お、そこのメガネ君、荷物持ってくれ！」
「あ、はい」
ノゾムと呼ばれた男の雰囲気に流され、銀之助は大量の荷物を受け取るが…。
ドォッ！
「うわあぁ!?」
まるで持ち上がらない。銀之助は逆に地面に叩きつけられてしまった。
「重いぜ？ほぉらよ、お土産だ！まだまだあるぞぉ！」
荷物からいろんな各国の名産品や名物を取り出して、剣斗や留美奈達に押し付ける。倒れている銀之助には、適当に上から乗っける。
「だれ…？」
「ＢＯＡＲＤの先輩で、レンゲルの最有力資格者候補だ…！」
剣斗は彼を見て、驚いたような表情になった。おチャラけているようだが、実力は確かのようだ。
「雲間ノゾム、よぉろしく！んでおまえ達、ＢＯＡＲＤの新入り？」
ノゾムは留美奈達を見るのは初めてで、剣斗と共にいるところからＢＯＡＲＤの構成メンバーだと勘違いする。なにしろ、剣斗はＢＯＡＲＤ以外での人との付き合いがほぼ皆無。彼が人と関わるならば、ＢＯＡＲＤの人間だと考えたからだ。
「いや、彼らはＢＯＡＲＤの構成メンバーではありません。実は…」

剣斗は、彼らとであったこと、ルリがＢＯＡＲＤに狙われていること、地下世界の存在などの2日で起こったことを伝えた。
「ＢＯＡＲＤがねぇ…。まぁ、胡散臭い組織だとは思ってたが、予想はハズレ無しってとこか」
意外と、落ち着いた雰囲気でその事実を受け止めた。
「ノゾムさんはどうします？ＢＯＡＲＤに残らなければ、カテゴリーＡを封印したとしてもレンゲルにはなれないと思いますが…」
「確かにな…。とりあえず、おれはＢＯＡＲＤに従ってるフリをする。レンゲルになり次第、抜ける。こんなのはどうだ？」
感づかれる可能性も否めはしないが、たしかにそのやり方が一番懸命かも知れない。ノゾムの判断は妥当なものだ。
「とにかく、おれ達はアンデッドを封印します。ノゾムさんは、ＢＯＡＲＤに戻ってください」
「了解。まぁ、頑張れや」
彼はのんきに手を振りながら、ＢＯＡＲＤまで帰還する事にした。
一方の剣斗たちは、アンデッドの捜索を改めて始める事にした。

報道のあった場所に向かうと、破壊された町並みの中心にアンデッドがいた。
その姿を見るなり、剣斗は息を呑む。
「ムウウゥ…！」
「カテゴリーＡ…スパイダーアンデッド!?」
「それって、さっき言ってたレンゲルの変身に必要なやつ…！」
噂をすれば何とやらだ。ノゾムの帰還と同じタイミングでスパイダーが出現した。
これを封印すれば、ノゾムは「仮面ライダーレンゲル」として戦える。
「…こいつを封印すれば！」
ブレイバックルにラウズカードを挿入し、ベルトを作り出し、意気込んで構えた。
「変身っ!!」

〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
　オリハルコンエレメントをスパイダーは避ける。剣斗はそれを潜り抜けてブレイドに変身し、スパイダーの後を追いかけ始めた。
「チェルシー！おれ達も剣斗に協力するぞ！」
「そうね…！」
　留美奈とチェルシーもブレイドに続く。ルリと銀之助は、じっと待っている事しか出来なかった。
「また…何も出来ないんですね、わたし…」
「ルリさん…」

　スパイダーは腕から発射される蜘蛛の糸を自在に操り、建物から建物へと凄まじい速さで動いている。
「こんのやろ！いい加減、降りて来い！」
　留美奈はヤケクソに風の力を使って小鳥丸を振り回す。
「あのスピードでは攻撃があたらん…。どうする…？」
　自問自答していたところに、チェルシーが歩み出た。
「わたしに任せて。はあああああああぁっ!!」
　右手の黒い塊をスパイダーに放つと、直撃もしていないのに、スパイダーは動きを鈍らせる。
　ゴオオオオオォッ!!
「ヌウウゥ!?」
　その作用にスパイダーも様子がおかしくなった。
「これは…!?」
「わたしの能力は重力。対象としたモノを重くしたり軽くしたり出来る。攻撃の瞬間に、拳を重くした一撃みたいに工夫もしてるの」
　ブレイドはその能力の強力さに驚く。
「仮面ライダーのように多彩な力は使えんが、その一極化した能力は強力だな…！」
　感心したところでブレイラウザーを構え、スパイダーに追撃を仕掛けていく。
　だが…。

「ツアアアァッ!!」
スパイダーは口から大量の子蜘蛛を吐き出した。
「ううぅっ!?」
ブレイドのスーツは子蜘蛛の影響を受けるわけではない。だが、いきなりなぞの物体が視界いっぱいに広がったために、彼は目をくらませる。
「フウウゥン!」
ドゴオオオォッ!!
「がはあぁぁっ!?」
その隙を突かれ、スパイダーの強力な一撃を受けた。
「くそ…強力なうえに頭が良いのか…!?」
ブレイドは今までのアンデッドとの戦いで、目くらましなどの攻撃を受ける事はなかった。なんども単調な攻撃のみばかりを繰り出されていたからだ。
ふと、先ほどの子蜘蛛の攻撃を思い出す。
「…まさか!?留美奈、チェルシー!ルリ達の場所に戻れ!!」
「どうして…!?」
「さっきの子蜘蛛だ!!早くしろ!!」
彼の言葉で、事の重大さを理解し、急いでもとの場所に戻る。

そのころ、すでにルリと銀之助の前には、無数の子蜘蛛が溢れかえっていた。
「銀之助さん…!」
「ど、どうしよう…。練氣銃はもうないし…!」
万事休す。だが、銀之助にあることが浮かんだ。危険かもしれないが、このまま殺されるよりは良い。
「ルリさん、ギャレンバックルを!」
「え…まさか!?」
最後の賭けだ。
ギャレンバックルを腰に装着するが、彼の脳裏に剣斗の言葉が浮かぶ。

～体の一部を失った者もいる～
怖くないわけが無い。
だが、このままでは…。
「…変身っ!!」
〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
勇気を振り絞ってギャレンバックルを操作し、オリハルコンエレメントを生み出した。
それは一部の子蜘蛛たちを弾き飛ばし、銀之助の前に向かってくる。
「…あああああああああああああああああああああああああああああっ!!!」
青い光の壁が銀之助の視界を奪う。
なにも衝撃は感じなかった。目の前にあったオリハルコンエレメントも無い。
手を見ると、くすんだ赤に染まっていた。
「これが…!?」
「銀之助さんが…変身した!」
そう、銀之助は適合率が合致していた。

彼は「仮面ライダーギャレン」へと至った。

使い方は、右腰にあるギャレンラウザーを見れば一目瞭然だ。
それを握り締めて腰のホルスターから引き抜く。
「うわあああああああああああっ!!!」
ダンッ!ダンッ!ダンッ!
一発一発が確実に子蜘蛛を消していくが、それだけでは足りない。
カーホルダーを開き、カテゴリー６のカードをラウズした。
〈ＦＩＲＥ〉
その瞬間、ギャレンラウザーの銃口から灼熱の炎があふれ出し、子蜘蛛達を焼却していく。
時間は３分と掛からず、無数の子蜘蛛を一掃する事に成功した。

「これが…仮面ライダーの力…!!」
ギャレンは両手を見つめて呟く。
ちょうどそのとき、留美奈達もそこに駆けつけた。
「あれって…仮面ライダー…!まさか、銀之助!?」
留美奈達のそれぞれの視界の中心に、ギャレンが映っていた。

続く…。

次回!

カテゴリーAは逃がしたか…!
ブレイドにギャレン。BOARDのWライダーだ。
そろそろ、おれの出番かぁ?
今、そのアンデッドを封印すれば…厄介な事になる
仮面ライダーレンゲル!ここに登場!

第4話「邪悪なお調子者」
今、その力が全開する…!

第４話「邪悪なお調子者」

ブレイドとスパイダーの戦いは未だ、スパイダーが優勢だった。
ガキィッ！ドガァァッ！
「ぐうっ!?がぁっ！」
蜘蛛の糸を使い、至る所の壁や建物を行ったり来たりしながらブレイドを翻弄し、視界に入ったところで攻撃を与える。
相手の攻撃はかなり知性的であった。
「このままでは…!!」
ブレイドはこの状況を打開するため、ラウズカードを使う。
〈ＴＨＵＮＤＥＲ〉
「はあああああああああぁっ…!!せあああああぁっ！」
バリイイィッ!!
「ツウウウウッ！」
しかしサンダーディアーの電撃も、スパイダーは蜘蛛の糸でやり過ごしてしまう。
そして、一気に落下の速度を利用してブレイドに襲い掛かってくる。
ドゴオオオオォッ!!
「ぐうううぅっ!?」
頭上から体重をかけられたことによって、ブレイドは地面に倒れ、スパイダーは馬乗りになる。
「スウウウゥ…！」
右手から大量の子蜘蛛が生まれる。この距離でこれを受けるとどうなるか分からない。かといって、この状況の打破も出来ない。
先ほどの衝撃で、ブレイラウザーが手の届かない場所まではじき飛んでしまったのだ。
「くそが…!!」
歯軋りして、抵抗をする。

そのとき…。
バンッ!!
「ヌアアアァッ!?」
突如、スパイダーの側頭部から火花が散って、ブレイドから離れた。
「なんだ…!?」
上手く状況を飲み込めずあたりを見渡すと…。
「…あれは、ギャレン!?」
ブレイドの赤い瞳には、仮面ライダーギャレンが映った。留美奈やチェルシー、ルリもいる。この場にいないのは…。
「適合者はまさか…五十鈴銀之助か!?」
「はい！一緒に戦いましょう！」
ギャレンはブレイドに駆け寄り、肩を抱えて起こす。
彼の手を借りて起きたブレイドは無言で頷く。そして、二人でそれぞれのラウザーを構えた。
スパイダーはうろたえるが、少しの時間の後、ブレイドとギャレンに走り寄る。
「ウオオオオオオオオォッ!!」
「五十鈴銀之助、援護を頼む！」「分かりました！」
ブレイドがスパイダーに立ち向かい、その背後からギャレンがギャレンラウザーを発砲する。
バァン！バァン！
「グヌウウウッ!?」
銃弾で怯んだスパイダーにブレイドが自身の剣でダメージを与える。
「おおおおおおおおおおおおっ!!」
ズバアアアァッ!!
「ガアアアアアッ！…フウウウウッ!!」
再び怯んだスパイダーだが、反撃を伺おうと口から糸を吐き出す。
「ふんっ！」
しかし、それはブレイドには通じない。すぐに反応し、地面を蹴って距離を置く。

「剣斗さん！」
　ギャレンの肩を借り、更に高く飛ぶブレイド。
〈ＳＬＡＳＨ〉〈ＴＨＵＮＤＥＲ〉〈ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ　ＳＬＡＳＨ〉
「あああああああああああぁ…ったあああああああああああああああああああぁっ!!!」
　雷を纏ったブレイドの剣がスパイダーめがけて振り下ろされる。
　ズバアアアアアアアアアアァッ!!
「グアアアアアアアアァッ!?」
　初共闘とは思えないコンビネーションだ。全ての攻撃が思い通りにスパイダーに叩き込まれる。
　しかし、スパイダーはまだ倒れていない。
「ウウウウゥッ…！」
「そんな…あの攻撃を受けて…!?」
「おまえがトドメを刺せば良い」
　ブレイドはギャレンの肩に手を置く。そしてゆっくりと後退した。
「…はい！」
〈ＤＲＯＰ〉〈ＦＩＲＥ〉
「はあああああああああぁっ…!!」
〈ＢＵＲＮＩＮＧ　ＳＭＡＳＨ〉
　体に燃えるように熱いエネルギーが巡る。ギャレンはそれを感じ取った瞬間、地面を蹴って飛んだ。
　一回転し、両足に込められた炎のエネルギーを全て、スパイダーに向けた。
「うあああああああああああああああああああああああああああああああぁっ!!!」
　ドゴオオオオオオオオオオオォッ!!
「グウウウッ…!?ギャアアアアアアアアアアアアァッ!?」
　立て続けに受けた二人の仮面ライダーの必殺技。スパイダーには耐えうる術を持ち合わせていなかった。
　地面に倒れ、ベルトのアンデッドバックルが開く。
「剣斗さん…！」

「おまえの初白星だ。封印しろ」
「はい…！」
ブレイドに指示されたギャレンは、コモンブランクのカードを取り出してスパイダーに投げる。
スパイダーは緑色に輝いてカードに吸収される。
「○＊＋＄＆…」
最後に人間では聞き取れない言語で何かを言い残して…。
こうして銀之助はギャレンへと変身し、レンゲルの変身に必要なカテゴリーAも封印する事に成功した。
ブレイドとギャレンは変身を解き、人間の姿に戻る。
銀之助は自身の封印したクラブのカテゴリーAを見つめる。
「僕が…倒したんだ…！」
何も出来なかった。役に立てる事なんか少ないと思っていたのに、留美奈やチェルシーでさえ出来ないことを成し遂げたのだ。
「やったな、銀之助！」「さすがね、メガネ君！」
留美奈やチェルシーは彼を賞賛し、ルリは複雑そうな表情ながらも笑顔で見つめていた。

「厄介な事になるぞ」

ふと聞こえた声。
振り返ると、そこにはサングラスをかけた黒ずくめの青年が立っていた。感情らしいものを一切感じない。そんな風にも取れた。
「そのラウズカードは邪悪な意思で満ちている。それを使ってレンゲルになろうものなら…使用者はカテゴリーAに支配される」
「貴方は…BOARDの人ですか？」
ルリがたずねると、青年はサングラスを外す。
目が見えれば感情が読み取れると思っていたが、それは勘違いだった。目を見つめても、まるで感情が読み取れない。鋭く冷たい瞳をしている。
「警告しておく。レンゲルは使うな」

それだけ言うと、青年は夜の闇に消えた。
「何者なんだ…あの男は…？」
しかし、今の彼らにそれを知る術は遺されていなかった。

レンゲルが使えるようになるためには、ＢＯＡＲＤに向かう必要がある。
剣斗達は数日後にノゾムと落ち合うことになった。
「よぉ！聞いたぜ、クラブのカテゴリーＡを封印したんだってな？」
「銀之助の成果です。ギャレンの初戦闘にして勝利。見込みはあります」
ノゾムが銀之助を見ると、彼は照れたように頭を掻く。
「ほぉ、グルグルメガネ君がねぇ…ちったぁ根性があるようだな！」
正直、期待はしていなかった。決して剣斗達の実力不足などは感じていないが、相手が強力なアンデッドであるというのに、即座の封印など出来ないと思っていた。
今後の戦いも期待が出来るかもしれない
「とりあえず、ＢＯＡＲＤにそれを持ってくぞ。レンゲルを貰うのはそれからだな」
ひったくるようにカテゴリーＡのカードを受け取り、ノゾムは去っていく。
「なんか…変わった人だな」
「ノゾムさんは自由な人なんだ。ＢＯＡＲＤに所属しているのも生活のための収入が目的で、本部も彼の自由奔放さは容認している」
あの自由奔放な行動が容認されているということはかなりの、組織で重宝されている存在であるだろう。レンゲルの資格者の最有力候補である時点で、それはそうなのかもしれないが。

ＢＯＡＲＤ本部にて、ノゾムは天王寺の部屋にいた。
「これより、君を仮面ライダーレンゲルとして認定する。アンデッド封印のため、頑張ってくれたまえ」
「うっす。ま、見てな。ちょちょいのちょいだ」

あっさりとレンゲルの資格を手に入れ、ノゾムは早々に部屋を出て行こうとする。
「待て」
ふと、天王寺が引き止めた。
「んだよ？」
「君に仕事を与える。ルリ・サラサの監視だ。特に何かする必要は無い。ただ、彼女がアンデッドに狙われる可能性もそう少なくは無い。その場合は、封印よりも彼女の守護を優先して欲しい」
「…あんたの事だ。おれが剣斗から全てを聞かされていることくらい、お見通しだろう？」
半ば挑発気味にあおるノゾム。しかし、それにも天王寺は動じる事もせずいつもの調子で答えた。
「ならば、この任務もこなせるだろう。もちろん、剣斗君もそうせざるを得ない」
何を言われようとも、天王寺は無表情に近い様子で呟く。ノゾムはその態度にいく文化の苛立ちを感じるものの、今は何も出来なかった。
「ま、好きにするさ」
「それで良い」

ノゾムは不満そうな面持ちでＢＯＡＲＤを出た。
「ブウウウウゥ…!!」
すると待っていたかのように、モールアンデッドが現れる。
「初陣がクラブのカテゴリー３とは、上出来だな」
ニヤリと笑い、レンゲルバックルとラウズカードをセットする。そして、腰につけた瞬間、ブレイドやギャレンと同じように、腰に紫色のベルトが装着された。
「…変身!!」
〈ＯＰＥＮ―ＵＰ〉
力強く呟き、ベルトを開く。
すると、紫色のオリハルコンエレメントが現れ、ノゾムに向かって

いく。
それが体をすり抜ける瞬間、声が聞こえた。
「コノ時ヲ…待ッテイタ…!!」
潜り抜けたとき、ノゾムの体は緑色の蜘蛛をモチーフにしたクラブの戦士「仮面ライダーレンゲル」となった。
「仮面ライダーレンゲル…参上!!ってか」
醒杖レンゲルラウザーを振り回しながら、彼の思うカッコいいポーズを決めた。
「ブウウウオオオオオオオオオォ!!」
モールは左腕の鉤爪状の武器を振り回しながら、レンゲルに襲い掛かる。
「無駄だっての。フンッ!!!」
ガギイィンッ!!
「ギャアアァッ!?」
その先には鋭利な三つ葉状の槍が備えられており、それがモールの体を抉る。
「ほら、まだへばるなよ！魅せ技はあるぜ？」
〈ＳＴＡＢ〉
レンゲルラウザーに威力を高め、再び振り下ろす。
ガギイイィッ!!
「グエアアァッ！」
「もっとあるから、まだまだ倒れられねぇぞ？」
モールの頭を掴み立たせる。
〈ＲＵＳＨ〉
ドッ!!!!
!!!!
「グオオオオォッ!?」
次は突発力を高めた技だ。レンゲルラウザーをモールに突き立てる。
それはモールの腹を突き破り、貫通した。

すでに意識を失っているようで、僅かな痙攣を残すのみ。
圧倒的優勢だ。今から封印しても良いだろう。

だが、何かおかしい。

あふれ出る興奮が収まらない。戦い足りない。
「おいおいぃ～。まだまだ遊びたりねぇだろぉ？」
間延びした声を放ちながら、レンゲルラウザーを引き抜いたレンゲルは、モールをぼろきれのように掴む。
〈ＢＲＩＺＺＡＲＤ〉
掴んだ右手に冷気を纏い、モールを氷漬けにする。
「そぉらぁっ!!!」
それを振り回して投げて、壁に叩きつける。
ドガアアァッ!!バリイイィッ！
「ア…ゲ…」
氷は砕け、弱りきったモールが現れるが、まだレンゲルの攻撃は止む気配が無い。
そこに…。
「ノゾムさん！」
ブレイドと留美奈、ギャレンにチェルシーが駆けつけた。
しかし、彼らは加勢が必要ないと感じた。まるで遊んでいるかのようにモールをズタズタにしていたのだ。
「よぉ…お前らかぁ。んじゃ、そろそろトドメといくか」
〈ＢＩＴＥ〉〈ＢＲＩＺＺＡＲＤ〉〈ＢＲＩＺＺＡＲＤ　ＣＲＵＳＨ〉
レンゲルは体中に冷気を纏い、両足にエネルギーも込めた。
「おおおおおおおおおおぉっ…!!!」
力が臨界点に達した瞬間、地面を蹴って体をひねり、両足で挟み込むようにモールを蹴りつける。
「でぇりゃああああああああああぁっ!!!」
ガッ!!!ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァッ!!!

その瞬間、凄まじい爆発がレンゲルの背後で起こった。
煙の晴れたとき、地面に横たわっているモールがいた。それに向けて、レンゲルはカードを投げる。
緑色の光を放ちながら封印され、モールの活動は完全に停止した。
「やりましたね」
ブレイドがレンゲルに近づくも、レンゲルは彼を見つめた途端、レンゲルラウザーを突きつける。
「ノゾムさん…？」
「わりぃな…疼いて疼いて仕方が無いんだよ…！アンデッドだけじゃ、この渇きは満たされない!!!」
ガギイイィッ!!
「ぐうううっ!?」
突如として勃発したレンゲルの暴挙に、ブレイドを含め、全員が目を白黒させる。
「ライダー同士なら、もうちっとは満たされんだろ？戦ってくれよ…おれとおまえの仲だろ？」
レンゲルはまるで気が触れたかのように戦いを渇望している。
留美奈とギャレン、チェルシーが立ちふさがった。
「なんのまねだよ!?」「こんなの間違ってます！」「正気に戻りなさい！」
それぞれが武器を構え、レンゲルの攻撃に備えている。
「いやいや…正気ではあるんだよ。だけども、なんか戦わないとヤベェんだよ。なら、おまえ達が相手してくれ!!!」
ブンッ!!!
レンゲルラウザーが唸りを挙げるが、なんとかその攻撃を避ける事は出来た。
「狂ってる…!!」「これが、あの黒い男の言っていたこと…？」
黒ずくめの青年が言った言葉の意味が、今になって理解できた。
おそらく、レンゲルの変身に使うカテゴリーAことスパイダーアンデッドの邪悪な意思が、ノゾムの精神を汚染しているのだろう。
それにより、戦闘を渇望する狂気にみまわれている。

彼を止めるには、今思いつく限りは変身解除しか考えられない。
しかし、レンゲルも強力な仮面ライダー。ブレイドやギャレンの次世代である彼に敵うかどうか。
「いくわよ留美奈。あの蜘蛛男を止める！」「わかってるっての!!」
「いつまで、無駄口叩いてんだァ!?」
ドガアアアアァッ!!!
レンゲルラウザーが地面に叩きつけられ、大きなクレーターを創り出す。それを見た瞬間、留美奈たちに寒気が走る。
これをまともに食らっていたら、命の危険もありえただろう。
〈ＢＡＬＥＴ〉
「たあぁっ!!」
バァン！
ギャレンは銃弾の威力を高めたバレットアルマジロでレンゲルの動きを封じ込めようとするが…。
ガギイイィッ!!
「効かんなァ…！」
レンゲルラウザーがそれを防ぎきる。
上空から、留美奈とチェルシーがそれぞれの攻撃を行う。
「「はあああああああああああああああぁっ!!!」」
〈ＧＥＬ〉
「これは効くぞ…！」
ブシャアアアァッ!!
レンゲルの右手から、電撃を纏った粘液が噴射される。
「うりゃあああああああぁっ!!」
しかし、それらは留美奈の小鳥丸で完全にいなされ、その背後からチェルシーの重力波が放たれる。
「喰らいなさいっ!!」
ドゴオオオオオオオオォッ!!
「うおおおぉっ!?」
レンゲルはその攻撃に対処できず、地面に膝を着く。
だが、チェルシーにとってその効果は期待通りではなかった。

「あの攻撃で、膝を着く程度なの…!?」
「いやいや、効いたぞ…!」
レンゲルはその攻撃すら、嬉々として受け入れる。
それを遠くから見ていたカリス。
「レンゲル…上手く行けば、ひと波乱起きるか…?」
そう呟いて、闇夜に消えた。

続く…。

次回!

ゾムさん、あんた狂ってるよ!
やりたいようにするだけなんだ
の黒ずくめの男…
なんでこのことを知ってたんだろう…?
テゴリーJ…!?

第5話「仕組まれた戦士」

今、その力が全開する…!

カ　あ　ノ

第５話「仕組まれた戦士」

レンゲルは未だ自身の武器を振りかざし、戦う事をやめない。
説得しても、適当に流されるのだ。
「くっそ！なんてタフなヤツだ…！」
留美奈達は肩の上下が激しくなっている。呼吸が荒くなっているからだ。チェルシーやギャレンも同様だ。
しかし、レンゲルだけは全く息があがっていない。それどころか更に感情を高ぶらせている。
「いいぞぉ…その調子だ！どんどん、戦おうぜ？」
レンゲルラウザーを振りかざし、駆け寄る。
そこに…。
「おおおおおおおおおおおおおぉっ!!」
ガギイイィッ!!ドガアァッ!!
「うおっ!?」
少し後ろでブレイラウザーを立てて胸を押さえていたブレイドがレンゲルラウザーを防ぎキックを放った事で、レンゲルは２ｍほど後方へ吹き飛ばされた。
「ノゾムさん、あんたどうかしてんのか!?」
「どうかしてるかもな。でも、戦えるんならそれで良いんだよ!!」
レンゲルは３と６のカテゴリーのラウズカードを取り出す。２枚技の攻撃は凄まじい威力がある。それをブレイド達は良く理解している。そのため止めようと走り寄るが、レンゲルは高くジャンプして場所を移動する。
「モグラと白熊のセッションと言ったところかぁ？」
カードをラウズしようとしたとき…。
「この世にいるカリスの二次物よ。俺に協力しろ」
ふと声が聞こえて、振り返るとサングラスとコートを身に着けた長

身の男が立っていた。
「なんだアンタ？」
「おいぃ。いま、良いトコロだから邪魔すんな…」
レンゲルが文句を言っている最中に、その男の姿は見る見る変わっていった。
寵臣の体は更に大きくなり、黒い鎧に青い羽のような装飾を幾つも纏った姿。右手には剣が握られており、今までのアンデッドとは大きく力が違うことをその威圧感から物語っていた。
彼らの知識から理解できたのは…。
「上級アンデッド…ダイヤのカテゴリーJ！」
そう、人間に擬態する事が可能な上級アンデッド「ピーコックアンデッド」と呼ばれる。
「イサカ…と呼んでもらおう。さぁ、俺に協力しろ」
イサカと名乗ったピーコックは、まずギャレンに襲い掛かった。
「うわっ!?」
ズガアアァッ!!
黒い剣を振りかざし、降ろす。その威力は凄まじい。ギャレンがとっさによけながら射撃を始めようとする動きよりも早く、それはやり過ごしがたい攻撃であった。
「ギャレン、君は戦士としてはまだ十分な実力を兼ね備えていない。だが、俺と共にアンデッドを封印し続ければ力は身につく」
「い…いやだ！君なんかに従わなくても…強くなって見せる！」
ピーコックの言葉を断固拒否するギャレン。
「君はどうだ…ブレイド!?」
突如、肩から青い羽が浮かび上がり、ブレイド目掛けて放たれる。それはまるで刃物のように鋭利な武器となっていた。
ガギイイイィッ!!
「くっ!?ぐうぅぅっ…!!」
ドガアアアアァッ!!
「ぬあああああああああああああぁっ!?」
必死にブレイラウザーで叩き落していったが手数が多すぎる。す

ぐにブレイドの動きが追いつかなくなり、羽の餌食となった。
「ちっ…つまらない冗談だな…！勧誘しながら攻撃するとはな…交渉術が致命的だ!!」
ブレイドは毒づきながらピーコックの行動について文句をつけて挑発する。
だがピーコックは溜め息をついて、留美奈達を見つめる。
「能力者…だったか？だがアンデッドを封印できる能力を持たないならば、用はないな」
「そうかよ！」
ゴオオオオオオオオォッ!!!
留美奈はピーコックに小鳥丸を振り下ろす。大きな竜巻が起こり、それがピーコックを包み込んだ。
だが…。
「フンッ!!!」
それを自身の力で振り払う。全く効いていない。
「なら…!!」
チェルシーが自身の能力を使い、ピーコックに重力攻撃を与える。
「…！」
さすがに重力という地球の法則には耐えられないのか、ピーコックは膝をつく。
「今よ、斬崎剣斗!!」
「わかった!!」
攻撃を仕掛けるならば今しかない。ブレイドはラウズカードを取り出した。
〈ＴＨＵＮＤＥＲ〉〈ＫＩＣＫ〉
「うおおおおおおおおおぉっ…ふんっ!!」
〈ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ　ＢＬＡＳＴ〉
ブレイラウザーを地面に突きたて、地を蹴って飛ぶ。空中で大きく一回転し、キックの体勢を取った。
「らあああああああああああああああああああぁっ!!!」
ブレイドの必殺技「ライトニングブラスト」の発動だ。これならば

トドメとは行かずとも、ピーコックに多大なダメージを与える事が出来るはず。
そこに…。
〈ＴＯＲＮＡＤＯ〉〈ＤＲＩＬＬ〉〈ＳＰＩＮＩＮＧ　ＡＴＴＡＣＫ〉
「ツアアァッ!!!」
「なに!?」
突如として現れたカリスが、ブレイドの攻撃を邪魔した。
ガギイイィッ!!
「ぐあああああああぁっ!?」
進路の垂直方向から強力な攻撃を受ければ、その攻撃は大きく揺れる。ブレイドは吹き飛ばされ変身が解除された。
「剣斗!!」
留美奈が抱き起こす。その剣斗の表情は苦悶に満ちていた。
「ぐうっ…カリス…!!」
カリスは悠然と立ち、ブレイド達を見下ろしている。
「邪魔をするな。オマエ達にウロチョロされると迷惑だ」
カリスアローを次はピーコックに向ける。
「久しいな」
「カリス…。まさか、貴様の手に渡っていたとはな」
ピーコックはカリスを忌々しそうに睨みながら呟く。どうやら二人は、何らかの因縁を持っているらしい。
「バトルファイトのルールは知っているだろう。俺は何のルール違反も犯していない。この力もルールに従って手に入れた。俺はそれを行使しているだけだ」
「…バトルファイト…?」
留美奈達はその言葉に首をかしげる。
一方の剣斗は、その言葉について何か知っているようだ。じっと見つめていた。
そこに…。
「おいおい、俺を無視しちゃいけないぜ?」
レンゲルがラウザーを構えて歩いてきた。その姿は威圧感さえ感

じる。
　しかし、カリスとピーコックはそれに動じる事はない。彼らもまた、威圧感を放っている。ここは威圧感で満ちていた。それに押しつぶされそうになっていたギャレンなどは、その感覚に麻痺さえ感じるようになっていた。
「だいたい、カリスの擬似物ってのは何だ？」
　レンゲルが抱く一つの疑問。カリスというのがこの黒い仮面ライダーらしき人物だという事は理解できる。剣斗から教えてもらったからだ。だが、そのカリスが、ブレイド、ギャレン、レンゲルの「二次物」というのが分からない
「…言葉の意味を考えれば分かるはずだ」
「つまりカリスが、ブレイドやレンゲルの元になってるって訳か!?」
　再び問いながらレンゲルラウザーを振り下ろす。
　ガギイイィッ!!
　しかし、カリスはそれを意図も容易く防いでしまった。
「ちっ…!」
「理解力は人並みにあるようで助かった。ならば、コピー品がオリジナルに勝てるかどうかも理解できるはずだ!!!」
　ズバアアアァッ!!!
　レンゲルの胸をカリスアローが切り裂く。
「ぬおぉっ!?」
　堪らず吹き飛び、その拍子にレンゲルバックルが外れて変身は解除された。
「いってぇな…!」
　頭をさすりながら、ノゾムは起き上がった。
「ノゾムさん!」「雲間ノゾム!」
　剣斗達がノゾムに駆け寄る。怪我は深刻ではなさそうだが、彼の精神状態が不安ではある。
「あら？なんか萎えた…」
　どうやら、先ほどの感情の高揚は変身時にのみ作用するものであるらしい。今のノゾムは変身前と変わらない様子だ。

「戻ったのか？」
「おぉ…もう大丈夫だ！」
彼らを見ていたピーコックとカリスは、顔を見合わせる。
「さて、カテゴリーJ…。ここで封印させてもらう」
「生憎、そんなつもりはない」
ドガアアアアッ!!
「っ!?」
不意に、目の前が粉塵で覆われる。その攻撃の主は上空にいた。
鷹のような姿をしたアンデッド。地面に降り立つと、そのアンデッドは眼鏡をかけた長身の男に姿を変える。
どうやら彼も上級アンデッドのようだ。
ピーコックも姿をイサカへと戻す。
「退こう。今はそのときではない」
「あぁ」
どうやらイサカとこのアンデッドは、協力関係にあるようだ。二人は景色に溶けるように姿を消した。
カリスは軽く息を吐き、剣斗達を見る。
「…また会おう」
そう言って、カリスもまた、姿を消していった。

留美奈達の家で待っていたのは、ノゾムへの説教だ。レンゲルの作用とはいえ、意識が明確にある状態でブレイド達に襲い掛かったのは、放っておける事態ではない。
「あんた、イカレてんじゃないのか!?」
留美奈は開口早々に罵倒するが、ノゾムはまるで反省の色も見せずにこう言った。
「イカレてるかもな。でも、あれは仕方ないぜ？なにしろ、戦いたくなっちまうんだからよ。一種の麻薬症状みたいなモンか？」
首をかしげながら言っていた。どうもあの状態の事が本人も不思議な感覚であったらしい。
「いい加減にしろよ!!なんでそんな涼しい顔してられるんだ!?」

「留美奈さん、落ち着いてください!!」
それを聞いていたルリは留美奈を止める。留美奈は何とか引き下がったがその目から怒りは消えていない。
ルリはこう言った。
「あの…黒い服の男の人が言っていたことが…このことなんですね」
スパイダーを封印した際に現れた黒ずくめの青年。彼は何かを知っているような口ぶりであった。
だが、レンゲルのことをＢＯＡＲＤでもない彼がなぜ知っていたのか…。
「上級アンデッドなのかもな」
「でもアンデッドなら、わたし達に忠告するなんてことはないはずよ」
たしかに、アンデッドにとって人類は敵そのものである。その敵に危機を忠告するなど、まず考えられない。
しかし、心当たりが剣斗にはある。
「あの男が人間の味方のアンデッドだとしたら?」
「そんなの有り得ない…」
ノゾムは言いかけたところで思い出した。
人間の味方をするアンデッドなら一体だけ存在する。
「じゃあ、あいつが…人類の始祖「ヒューマン・アンデッド」だっていうのか?」
「ヒューマン・アンデッド…?」
銀之助は首をかしげる。剣斗はそれに気づいて説明を始めた。
「アンデッドというのは、さまざまな生物の先祖だ。彼らは全部で53体存在し、それぞれが種の繁栄を望んで、最後の一体になるまで争った。これを「バトルファイト」という。結果的に生き残ったのは、人類の始祖であるアンデッド…ハートのカテゴリ2である「ヒューマン・アンデッド」だ」
その言葉は留美奈たちにとって妙な説得力があった。たしかに頭脳は優れているものの、強靭な肉体や筋肉、爪や牙も持たない生物がこの地球上で最も繁栄しているというのも奇妙な話ではある。だが、それがアンデッドによるバトルファイトの結果だと考えれば仮説と

はいえ辻褄が合う。
バトルファイトという単語について、チェルシーが思い出す。
「さっき、上級アンデッドとカリスが言っていた会話…」
ピーコックとカリスはこんな会話を彼らに見せていた。

「カリス…。まさか、貴様の手に渡っていたとはな」
「バトルファイトのルールは知っているだろう。俺は何のルール違反も犯していない。この力もルールに従って手に入れた。俺はそれを行使しているだけだ」

「もしかして、カリスというヤツもアンデッドなのかもしれないわね…。バトルファイトがどうとか言ってたし、カテゴリーJとも面識があるみたいだし…」
いろんな話がありすぎて、留美奈の頭はパンク寸前。
「あぁもう！いろんなことが多すぎてわかんねぇよ!!」
彼らは未だ、頭を抱え続けていた。

同時刻。
天王寺はレンゲルバックルに似た3つのバックルを見つめている。
何かの気配を感じたのか、振り返る。
「来ると思っていたよ、カリス」
目の前にはカリスが立っていた。
「こんなところで、こんな大きな企業を立てているとは…相変わらず、姑息なマネをしてくれるな」
「だが…ブレイドもギャレンもレンゲルも、君の対応次第では味方になることも十分にありえる。まぁ、君が友好的になればの話だが」
「…無理だな。俺の正体を知るや否や…奴らがどういった行動に出るかは見て分かる」
どうやら、この二人も良く知っている間柄らしい。
「そういえば、イサカやタカハラと会ったようだね」
「奴らも此処に？」

「ライダーシステムを渡せと詰め寄ってきた。まぁ、返り討ちにしてあげたがね」
そう言って、天王寺はあるラウズカードを見せた。光の関係でカリスの目には黒い長方形の固まりにしか見えない。
だが、そのカードがどんなものかはなんとなく理解できた。
「本当に卑劣で姑息だな。貴様も正々堂々と自分の力で戦えばどうだ？」
「君が封印したそのカード…。それは君自身の力といえるか？」
その言葉には返す言葉がない。たしかにラウズカードには別のアンデッドの力が宿っており、その力を行使するカリスは自身のみの力で戦っているとは言い難い存在だ。
「チッ…ああ言えば、こう言う。本当に相変わらずだな」
「こうでもしないと、君達に勝てそうもないのでね」
ふと、カリスはアローを天王寺の首に突きつける。
「ならば、ここで勝てないようにしてやる。死ね」
「君には私は殺せない。私が君を殺せないように…」
相変わらず、言葉の裏をかいた返答で、返す言葉を失わせてくる。彼はいつもそうだった。
適当な言葉で話題を変えたり、話し相手の言葉の盲点をつくなどして説得や話し合いはまるで通じない。頭脳が優れた存在であった。
カリスはアローを下ろし、闇の中に消えた。
「いつか分かる。このバトルファイトの勝利者は…必ず俺になる。…必ずな」
カリスの消えた闇を見つめていた天王寺。
ラウズカードをしまって小さく呟く。
「勝利者など必ず決まるわけではない。「運命」というモノは、この世にいる生物が握れるものではないのだから」

続く…。

次回！

リーKか…。

レンゲルを…救いたい。

アンデッドに良心などない。

ない。だって…

感情は同じじゃないもの…。

第6話「不死生物の良心」

今、その力が全開する…！

カテゴ

違うな。

分から

第６話「不死生物の良心」

話し合いの結果、ノゾムは緊急事態を除いてレンゲルの変身をしないことを約束に、レンゲルバックルを所有する事になった。チェルシーや剣斗は真っ向から反対したのだが、ルリが押し切ったのだ。

自分が戦えない今、この人の可能性を信じていたい。そういい続け、何とか説得した。

「…ルリ」「はい？」

ふと話し合いのあとに剣斗から呼び出され、ルリは彼のところに行った。

「状況は留美奈から聞かされてるだろう？ノゾムさんは確かに人間のときは俺よりも実力がある。だがレンゲルを任せていたら、おれたちに危害が及ぶし、おまえの安全も危ぶむぞ？」

「はい、充分に分かってるつもりです」

彼女の表情は決して油断などは感じられない。緊迫した表情だった。

「剣斗さんも、ノゾムさんのことは信頼していたでしょう？」

「まぁ…戦い方の基本を学んだのは、あの人だからな」

剣斗とノゾムは師弟関係であった。ＢＯＡＲＤに所属して間もないころ、ブレイドの資格者となった剣斗は、戦い方を知らず、不安だらけであった。

そんな彼の不安を取り除いたのがほかでもないノゾムである。ノゾムは、彼に戦い方の基本を学ばせた。決して、何かを教えたという形ではない。何かの課題を与え、自分で学び取るようにしていた。結果、剣斗はノゾムの想像以上の戦闘技術を身につけた。これは剣斗が１４歳で所属して５年もの期間を有していた。

「だったらあの人の強さは、わたしよりも剣斗さんのほうがわかってるはずです」

「そういう問題じゃない。あの人でさえレンゲルの精神汚染に敵わなかったんだぞ。この意味が分かるだろう？」

レンゲルの影響は極度のものだという事だ。先にもあげたとおり、あの強い実力を秘めたノゾムでさえ、意思は支配されなかったものの、精神が侵食されてしまったのだから。
だからこそ、剣斗は不安であったのだ。
もし彼が完全に敵対するような事があった場合、勝てる自信がない。いや、勝てないだろう。実際、ラウズカードも上級のカードは同じではあるが、合計はレンゲルの持つクラブのプライムベスタのほうがそろっているのだ。
ブレイドは未だA、2、3、4、5、6、7、Qの9枚。
ギャレンもA、2、3、5、6、8、Qの7枚。
レンゲルはA、2、3、4、5、6、7、9、10、Jの10枚。
ラウズカードが多いほうが戦法も増えるし、何よりライダー自身の力も向上する。
この状況ではブレイドとギャレンには勝ち目がないのだ。
「でも…分かりませんよ。だって…感情は同じじゃないもの…」
ルリはそれでも彼を…彼ら仮面ライダーを信じたいと思った。
自分が戦えない今、彼らを信じることしか出来ないからだ。

ふと、別の場所で風来坊のような出で立ちの男が居た。彼は風を感じようと、目を閉じて他の感覚を鋭くさせる。
風による振動で、声が聞こえてきた。
「そうか…」
先の剣斗とルリの会話だ。10数kmも離れており、普通の人間ならば聞こえる事などありえない距離だ。つまり、人間に出来ない事をなしえる事が出来るのは、能力者かライダーか…
もしくはアンデッドのいずれか。
その答えはカリスが出した。
「カテゴリーKだな?」
彼は男の背後からゆっくりと忍び寄っていた。
「…君がカリスになったか」
しかし、男はカリスに気づいていた。それも風に乗って微かな足音

が聞こえたからだ。だが、それにカリスが気づかないわけではない。
彼の聴覚の良さは兼ねてより知っている。
「たしかに、バトルファイトのルールでは君がカリスになるね。…厄介な事に変わりないけれど」
「何が目的だ?バトルファイトは前々から興味を持っていなかったオマエだ、何か別の狙いがあるんだろう?」
カリスは警戒しながら男に聞く。
「そうだね…俺はレンゲルを…救いたい」
「無駄だ。カテゴリーAの精神汚染にやられている」
「そこは彼の気持ちだよ。俺はそれを信じるだけだ」
そういうと、男はアンデッドとしての姿…「タランチュラアンデッド」に変化し、腕から生み出す粘着質の糸を使って、別の場所へ移った。
カリスはそれを追おうとするが、踏みとどまった。
「まぁ…次がある。ヤツはレンゲルに任せておけば良いな」
そう言って、闇に姿を消した。

程なくして、男はノゾムの前に現れた。
「レンゲルだね」
「何だアンタ?BOARDの職員じゃないな。アンデッドか?」
「シマノ…と呼んでくれ」
その問いに答えるように、シマノはタランチュラとしての姿を現した。
「君はレンゲルの力を受け入れすぎなんだ。カテゴリーAの闇を受け入れてはいけない」
「何を知ってるかわかんねぇが、アンデッドなら倒す。それなら剣斗達も文句は言わない」
そう言って、レンゲルバックルを取り出そうとするが…。
「待ってください!」
そこにやってきた剣斗達に止められる。
「おい、アンデッドなら…!」

「まだ危険には変わりありません！」「そういうことだ！」
留美奈と銀之助はそう言い聞かせ、小鳥丸とギャレンバックルを取り出す。
「変身！」
〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
銀之助はオリハルコンエレメントを潜り抜けてギャレンに変身すると、タランチュラに走り寄りながらギャレンラウザーを発砲する。
「うあああああああああっ!!!」
バンッ!!バンッ!!バンッ!!
「はあぁっ!!」
さらに留美奈の風の能力を使った一太刀も襲い掛かる。
しかし、タランチュラはそれらを避けながら説明する。
「待て！俺は君達と戦うつもりはない。レンゲルと戦いたいんだ。救うために！」
「アンデッドに良心などない！変身!!」
〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
剣斗は言うが早いか、ブレイドに変身してブレイラウザーを振りかざす。
「おおおおおおおおおおおおおおおぉっ!!!」
ザッ!!
３人の攻撃では、タランチュラも避けきれず、留美奈の刀が彼の肩を抉った。
「グウッ…!!」
そんな攻撃を受けたとしても、タランチュラは反撃に移ろうとしない。ただそれを受け入れていた。
「これで…君の闘争本能は収まったか？」
「なんで反撃しないんだよ？」
留美奈の問いにタランチュラは人間の姿に戻ることで答えた。
「言っただろう。俺は争いたくはない。レンゲルを救いたいだけだ」
男はそう言って、脂汗の出た穏やかな表情を向ける。肩からは緑色の血があふれ出ていた。

ギャレンはそれを見て、構えていた銃をおろした。
「…剣斗さん、留美奈、やめよう。僕、この人を信じてみたい」
「騙されるな…アンデッドには…!!」
「そう、あるのは闘争本能だけだ」

その声と共に、イサカとタカハラが現れた。
「カテゴリーJ…!」
その姿はすぐさまアンデッドとしての異形の姿に変わる。
そしてイーグルが続きを喋った。
「なにしろ、ブレイド…君はカテゴリーQに苦汁をなめさせられたからね」
「…!」
ブレイドはその言葉に少しだけ反応した。
何故、彼らがその事を知っているのだろうか…?
カテゴリーQは苦労に苦労を重ね、ようやく封印したアンデッド。だが、その状況の事を彼らは知らないはず。
可能性があるとすれば、カテゴリーQであるカプリコーンアンデッドが、彼らとコンタクトを取っていたか。
いや、その可能性は間違いないであろう。
「どういうことだよ?」
留美奈が問うと、ブレイドは重い口を開いた。
「カテゴリーQは初めて対峙した上級アンデッドだ。当時のおれはアンデッドの知識も浅いがため、人間に擬態できる事を知らず、彼と友好的に接していた。その結果…」
「ＢＯＡＲＤの職員を殺してしまった」
おそらく、ブレイドの仮面の奥の顔は苦痛で歪んだ表情なのだろう。
どこかしら、息も上がっているような雰囲気である。

「だからアンデッドを容易く信用するな。奴らは所詮、違う種族。俺たちと手を取り合うことなんか出来ない。もし違うというのならば…おまえ達は甘い」
　立ち上がって、ラウズカードを取り出す。
〈ＳＬＵＳＨ〉
「はあああああああああっ…!!」
　ブレイラウザーに青い光が灯る。スラッシュリザードのエネルギーが刀身に漲っているのだ。
　その光の刃を構えて、三体のアンデッドに攻撃を仕掛けていく。
「はあああああああああああああああああああっ!!」
　イーグルが前に進み出る。
「僕が行こう」
　走ってくるブレイドに近づき、右手のカギ爪状の武器で応戦した。
　ガギイイィッ!!
「くっ…!!」
「君では、僕を倒すことはできない。カテゴリーＱを封印できたのはまぐれだ。それに僕は…君のように頭は固くない!!」
　ズバアアアァッ!!
「ぐうううっ!!」
　ブレイドは胸を切り裂かれ、ダメージを追った部分を手で押さえながら後退する。
「剣斗!」「剣斗さん!!」
　留美奈とギャレンがブレイドの身を案じながら、イーグルに攻撃を仕掛けた。
「留美奈!」「あぁ!!」
〈ＦＩＲＥ〉
　ギャレンの炎の弾丸を創り出し、それを留美奈の風で増幅しつつ、強大な一撃を生み出した。
　しかし、
「フッ!」
　上空に飛ぶ事でイーグルは避け、鋭利な羽を彼らに向けた。

「ハァッ!!」
ザァッ!!
「くっ!?」「うわあぁっ!」
ギャレンはともかく、留美奈は生身の状態でこれを直撃してしまえば、とんでもない事になってしまう。
だが…。
「フン…!!」
突如、タランチュラが彼らの前に立ちふさがり、白い霧のようなオーラをもってその攻撃を防ぎきった。
「カテゴリーK!何のマネだ!?」
「彼らを救いたい。それだけだ」
タランチュラは先ほどは全く見せなかった殺気を見せた。それを感じ、ブレイドたちはたじろいだ。
彼はここまで危険な存在なのだ。
カテゴリーKとなると、カテゴリーJ二人でも苦戦は免れない。
イーグルとピーコックはそれを感じ、人間の姿に戻った。
「無駄な足掻きだ。警告しておく」
「どうかな?」

カリスはその間もアンデッドと戦っていた。
「貴様…!俺の計画を…!」
「ブラックファングだったか?そんなチンケなモノでこのバトルファイトを制するつもりだったというのか?」
彼は今、ハートのカテゴリーJを封印しようとしていた。
このアンデッドは人間の姿に化けてBOARDに潜入し、ブレイド達専用のバイクの後継機「ブラックファング」を奪い、その力でバトルファイトの勝利者になろうとしていた。
「諦めろ。人間の力…いや、他者の力に頼るようでは、オマエは何度バトルファイトが起ころうとも、絶対に勝者にはなれない」
〈FLOAT〉〈DLILL〉〈TORNADO〉
〈SPINNING DANCE〉

その音と共に、カリスの体に黒い風が巻き起こり、回転しながら宙に浮いていく。その勢いはどんどん強くなり、そのままドリルのようにスピンしながら、ウルファンデッドを貫いた。
ドガアアアアアアアッ!!!
「グワアアアアアアアアアアアッ!!!」
大爆発がおき、その炎の中にカリスはプロパーブランクを投げる。
炎が消えると同時に、カードはカリスの手に戻ってきた。
「残り一枚…!」

カテゴリーJがいなくなったところで、この場はいったん穏やかになった。
「ブレイド。君に何があったのか、教えて欲しい」
「アンデッドに喋る事はない」
剣斗はシマノの言葉にも、全く聞く耳を持っていない。
「そうか…その様子だと、君はアンデッドに唯ならぬ恨みを持っているらしいね」
「…」
図星をつかれて、剣斗は少し歯軋りをする。
「もしかして、剣斗がブレイドになったのも…」
留美奈が言いかけたところで剣斗が口を挟んだ。
「違う。おれは、9年前にブレイドにアンデッドから守ってもらったんだ」

9年前、10歳の剣斗は、友達を作らない主義であった。
というのも、昔は友達が大好きであったが、自分の意見を通す頑固な性格が災いして、あまり回りの人間から好かれなかったのだ。努力しても友達が出来ないため、作ることをあきらめてしまった。
そんな彼が、ある日に怪物と出会った。
「グルルルルゥ…!!」
それはカテゴリー3のライオンアンデッドであった。
「ば、ばけものだ…!!」

助けを呼ぶ事は出来なかった。助けてくれる人間などいないのだから。
そこに…
カッ!!!
「っ!?」
突如、眩い光に包まれ辺りは何も見えなくなってしまった。
数分後、彼がゆっくりと目を開けると、その怪物は居なかった。
辺りを見回す。
その目に映りこんだのは…。
歩き去っていく仮面ライダーブレイド。
その姿は太陽に照らされている事も手伝っていたが、黄金に光り輝いていた。
まるで王が鎧を纏ったかのような荘厳な出で立ちであった。
「ま、まてよ!誰なんだ!」
その問いにも金色のブレイドは答えず、歩き去っていってしまった。

「奴が何者なのかは分からない。なにせ、9年前にライダーシステムなど完成していなかった。完成したのは2年前だ。その装着者を探していたBOARDにスカウトされ、おれはブレイドとなった」
彼の仮面ライダーになった理由は、スカウトもそうだが以外にも憧れからだったのだ。
「ブレイドに成りたての頃は、甘かった。上級アンデッドとは分かり合えるのではないかとも考えていたからな。だがそれは結局、無駄な犠牲者を生み出した」
留美奈も銀之助も、それらの言葉をじっと聞いていた。
「分かり合うなんて甘い事を言っていれば、大切なモノを失うぞ」
「それが原因で、君は俺の事を…」

シマノは暗い表情で呟いた。
「そうか。…君の信頼を得るのは難しそうだな…」
剣斗を見つめ、次にノゾムを見据えた。
「…なんだよ？」
「君も何か背負っているはずだね。そうでなければ、カテゴリーAは人間の闇に救う事は出来ないのだから」
「すぐに答えるのはイヤだね」
ノゾムは舌を出し、その場から走り去った。

その後、留美奈は剣斗を除いてその場に残った者と、ルリとチェルシーを連れて、別の場所に移った。
家に行かなかったのは、剣斗が拒否したからだ。
せめて、人気のない場所で話し合えという事を条件に剣斗は、シマノとの会話を許可した。
「ごめんなさい、シマノさん。剣斗さんだって、きっと苦しんでると思うんですけど…」
「かまう事はない。彼の痛みはなんとなく理解できるからね」
銀之助が謝っている姿を、シマノは優しく制した。
「さて…レンゲルだけれど…。カテゴリーAは前回のバトルファイトの時点から、狡猾で知恵があった。彼はおそらく、レンゲルのことをどこかで知り、そのシステムを逆手にとって敢えて封印されたんだろう」
アンデッドは封印された場合、活動を完全に停止するはず。それを逆手に取るとはどういうことなのだろうか。
留美奈達が理解できないでいると、それを感じたシマノが説明を加えた。
「以前のバトルファイトでは、アンデッドがアンデッドを封印する事が出来た。しかし、今はそれが出来ない。つまり、カテゴリーAはアンデッドを封印できるライダーシステムを利用するために、わざと封印されたという事だ」
「あの蜘蛛が、そんな事を考えてたの？」

チェルシーが疑問を感じるのも無理はない。スパイダーは人語を話さず、様子も本能のままに動いていただけに過ぎないように感じていたからだ。
「人語は話せないが、カテゴリーAはアンデッドの言葉を話せる。君が知っているカテゴリーAのあの動きが知的なものだとは思えなかったのだろう。彼は粗暴でもあったからね」
この男は剣斗やノゾム以上にアンデッドに詳しいのだろう。そう感じた。
なにしろ、アンデッドそのものなのだから。それなのに、危険や脅威を感じない、不思議な雰囲気の男だと、チェルシーは感じた。
「とにかく、今は彼がレンゲルに変身しないように気をつけることだ。時が来れば…私がカテゴリーAを押さえ込む」
シマノは表情を変えずにそう言った。

一方、ノゾムは一人で夜の道を歩いていた。
「このおれが…剣斗達に心配されるとはなぁ…」
彼自身も、レンゲルになったときのことは覚えている。だが、あの高揚感を抑えることは彼にとっても難しい。
だが、本来ならばカテゴリーAに意思をも支配されるはずだったのに、それを押さえている辺り、彼の意志の強さは並ではないと考えられる。
だが、結果としてレンゲルとして思い通りに使いこなせないのは事実だ。
何とかして、カテゴリーAを押さえ込まなければならない。
そうしなければ、いずれ剣斗達を傷つけてしまいかねないのだ。
「…精神を鍛える…か…」
その方法に悩んでいたとき…。
「グウウウッ…!!」
スコーピオンアンデッドが姿を現す。
「こいつは確か…クラブのカテゴリー8か…!」
BOARDの資料から、この存在もしっかりと理解できている。

「剣斗に助けを…！」
呼ぼうとしたところで思い留まる。
弟分に助けを呼ぶ兄貴分。そう考えた途端、彼の中で異様なむなしさが広がる。
何より問題なのは…。
自分自身、戦える力を持っている事だ。
「…こいつを封印するだけ…それだけだ…」
言い訳をするように自分に言い聞かせ、レンゲルバックルとラウズカードを取り出して腰に装着する。
待機音が流れ始めたとき、自分の以前のおこないが思い出されるが…。
それでも…。
「変身…!!」
〈ＯＰＥＮ―ＵＰ〉
変身した。
紫色のオリハルコンエレメントを通り抜けると、あの声が聞こえる。
良ク来タナ…待ッテイタゾ…!!
声のあとに、ノゾムの姿は仮面ライダーレンゲルとなった。
「行くぞ…。おまえを封印してやる」
そう呟き、スコーピオンに向かって走っていった。
続く…。
次回！

くそ…駄目だ…!!

カテゴリーAを押さえるんだ!!

アンタ、剣斗の師匠なんだろ!?

再び、この世で動けるぞ…!!!

カテゴリーAの人格…!?

封印しろ…私を…カテゴリーAの意思と諸共に…

君が…仮面ライダーレンゲルだ

第7話「精神と心の中で」

今、その力が全開する…!

第7話「精神と心の中で」

ガギィン!!
レンゲルが圧倒的に優勢だった。レンゲルラウザーを振り回し、スコーピオンに何度もぶつける。その攻撃に意図も容易くスコーピオンは怯み吹き飛ばされる。
イメージしたとおりの戦いだ。勝てない理由が見つからない。
だが…。
「どうしたよぉ!そんなモノかぁ!?」
思い通りに行き過ぎて気に入らない。少しでも抵抗してくれるとも考えていたが、そんな事が全く無いのだ。
「つまらないんだよ!!」
ドガアアアアアァッ!!!
「ギャアアアアァッ!?」
どこか、納得がいかない。もっとこの戦いに高揚感が欲しい。
そう考え始めたところで気づいた。
おれは…また戦いを求めている。
「くそ…駄目だ!!」
頭を振って、先の考えを必死に消そうとする。
だが、そうするたびに…
足りない。
楽しみたい。
戦いたい。
そんな言葉ばかりが頭をよぎる。
「落ち着け…こんな事を考えんな…!!」
なんとかその高揚感を抑えようと自分に言い聞かせる。だが、それが隙となり…。
ドガアアアァッ!
「うおおおおぉ!?」
スコーピオンの爪によって胸を切りつけられ、地面を転がってしま

う。
「この野郎ぉ…何すんだよ!!!」
その事で頭に軽く血が昇る。そしてそれが忘れようとしていた高揚感を再びたぎらせてしまう結果となってしまう。
「ノゾムさん!!」
そこに、ギャレンが駆けつけた。ラウザーを構えて彼の援護に入ろうとする。
「大丈夫ですか!?」
「ギャレン…!ギャレン…!」
目の前に強い力を持っている存在が現れる。それが最後の引き金となった。
〈ＳＣＲＥＷ〉〈ＢＬＬＩＺＡＲＤ〉
「ノゾムさん!?」
〈ＢＬＬＩＺＡＲＤ　ＧＡＬＥ〉
「うおおおおおおオオオオオオオォ!!!」
雄叫びと共に、レンゲルの拳がギャレンの胸に突き立てられた。
「うわあああああああぁ!!」
その威力でギャレンは吹き飛び、変身が解除されてしまった。
強力な攻撃と不意打ちによって、本人の集中力の低下や戦闘経験の浅さにより変身時間が続かなかったのだ。
そして、ブリザードゲイルの吹雪の余波によってスコーピオンは氷付けになってしまう。
〈ＳＴＡＢ〉〈ＲＵＳＨ〉
「フンッ!!」
氷付けになったスコーピオンに止めを刺すため、レンゲルラウザーにラウズカードのエネルギーを込め、力の限り突き刺した。
ドスッ!!
「…!?!!」
スコーピオンは悲鳴を上げることができない。氷付けのために声を出せず痛みだけを感じている。
そしてレンゲルがプロパーブランクを取り出すと、それをスコーピ

オンに突き刺した。
氷が融解しながら、スコーピオンはカードに吸収されていく。
そして、プロパーブランクはプライムベスタのカテゴリー８へと変化した。
「フン…」
そしてレンゲルは胸を押さえてうめいている銀之助を睨む。
「感謝するぞ、ギャレン。おかげで俺は再び、この世で動ける…!!」
声が変化した。ノゾムのすこし若々しい男の声から一転、低い男の声へと変貌する。
「そんな…ノゾムさん…アンデッドに…!?」
「俺の名はレンゲル。…最強の仮面ライダー!!!」
銀之助がレンゲルの元に向かえたのに、他の者達がその場にいけなかった理由。
それはタカハラ達にあった。
「あのレンゲルを仲間に迎えたいので、貴方達に邪魔をして欲しくないのですがね…」
「大人しく、ここで倒されるが良い」
彼らもアンデッドを封印できるシステムや力を備えていない。そこにレンゲルという特殊なライダーが現れた。これを利用しないては無いと言う訳だ。
彼らと遭遇する前に銀之助は別行動を取った事で、運よくレンゲルと遭遇できたのだ。
「こっちからしたら、ノゾムさんをおまえらなんかに利用させて溜まるか！」
「あの人を解き放つ。そこを退け!!」
〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
「変身!!」
青白いオリハルコンエレメントを潜り抜けて、剣斗はブレイドへと変身し、両隣にいた留美奈とチェルシーはそれぞれ攻撃態勢に移る。
最初に動き出したのはブレイドだ。
「おおおおおおおおおおおおおぉっ!!」

ブレイラウザーを振りかざし、タカハラに斬りかかる。
それよりも早くタカハラはイーグルへと変貌し、右手にある鉤爪状の武器で防ぐ。
ガキイィッ!!
金属同士がぶつかり合う音が響く。
「やはり、その程度では私達には勝てない!!」
ドガアアアァッ!!
「ぐうぁっ!」
ブレイドのラウザーを弾いた隙を突き、彼の胸を斬りつける。
やはりイーグルのほうが優勢だ。
そして、留美奈とチェルシーはピーコックと対峙している。
「ハアアアァッ!!」
ピーコックの鋭利な羽の嵐が迫る。
「はっ!!」
しかし、チェルシーはそれを重力で地面に叩き落した。ピーコックは少しだけ驚く。
「ほう…能力者の力か…」
「余裕こいてんじゃねぇぞ!!」
留美奈がすぐに攻撃を仕掛ける。風を纏った小鳥丸を振り下ろすと、ピーコックはそれを右手で防ぐ。
だが…。
「…!?」
風の余波で、吹き飛ばされる。ダメージ自体は無いものの、意外にもこの戦いは留美奈たちが押している。
だが、ピーコックはそれで黙っているわけではない。
「人間ごときが…この俺をコケにしてくれるとは!!」
長い剣を構え、彼らに反撃を仕掛けていく。
それを離れた場所から見ていたのはシマノ。
「…チャンスは今しかないな」
そう呟き、レンゲル達の元へと向かった。
そしてその間も、ギャレンはレンゲルに痛めつけられていた。

「ムン！ウオオオォッ!!」
ガギン！ドガアアアァッ!!
「ぐっ！うわあああぁ！」
ギャレンは遠距離方のライダーだが、レンゲルが前に前にと向かってくるために距離を取れない。
結果的にギャレンの不利な状況となっているのだ。
「ノゾムさん…あなたは剣斗さんの師匠でしょう!?」
痛む肩を庇いながら必死に説得するギャレン。だが、レンゲルは全く変化が無い。
「言ったはずだ。俺の名はレンゲル、ノゾムではない」
〈ＲＵＳＨ〉〈ＢＬＬＩＺＡＲＤ〉〈ＰＯＩＳＯＮ〉
〈ＢＬＬＩＺＡＲＤ　ＶＥＮＯＭ〉
「オマエはここで消えるが良い。ブレイドとカリスも俺の獲物だ!!!」
毒と吹雪を纏ったレンゲルラウザーがギャレンを貫くために、猛スピードで向かってくる。
「くっ…!?」
ギャレンラウザーを使って抵抗を試みたが、右肩が痛むためにラウザーを持ち上げる事が叶わなかった。
「死ねェッ!!!」
絶体絶命。
そこに…。

ドッ!!!

突如として現れたタランチュラ・アンデッドがギャレンを庇い、ブリザードベノムの餌食となった。
「ウゥ…！」
「シマノさんっ!!!」
タランチュラは力なく地面に倒れ伏し、アンデッドバックルも封印を許すように開いた。
「カテゴリーＫか…。都合が良い、貴様を封印してもっと強くなる！」

「…俺の負けだよ、カテゴリーA」
プロパーブランクをとりだし、タランチュラへ落とす。
緑色の光に包まれる中で…。
「銀之助君、もし俺が駄目だったら…そのときは頼む!!」
そう叫び、封印された。
「フン、馬鹿め。もう封印されたというのに…」
レンゲルの手には、カテゴリーK「エボリューションタランチュラ」が握られている。
完全に封印されてしまったのだ。
「ちょうど良い。カテゴリーKの力で止めを刺してやる」
カテゴリーKのラウズカードをレンゲルラウザーに近づけ…。
〈EVOLUTION〉
ラウズした。
その途端…。
「ヌウウウッ!?」
レンゲルは黄金色に輝き、悶え苦しみ始める。
「まさか…カテゴリーKめ…これが狙い!?」
シマノはあえて封印されたのだ。それによってレンゲルの内側からカテゴリーAと直接対決をするのだ。
「おのれェ…邪魔をするなアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!」

夕焼けの空が広がる荒野。
日本では見かけない土地だ。おそらく外国なのだろう。
そこにノゾム、シマノ、スパイダーアンデッドの3人が立ち尽くしていた。
「ここが…君の闇なのだね」
「何…?」
「カテゴリーAは、君の記憶の中で最も暗い闇を抱えているここで、君の精神に干渉をかけていたんだ」
シマノの傍らには、小さな少年が銃を抱えて倒れていた。
血が流れており、呼吸をしていない事から生きてはいないだろう。

「過ぎた事さ」
「そう、過ぎた事。だが、その過ぎた事が君の心に闇を巣くわせていた」
彼が世界中を飛び回っていたのは、彼の親に理由があった。
父親は戦場カメラマンであり、妻と息子を良く連れて行っていた。もちろん危険には晒さず、いつも安全が確保できる場所に置いていった。
その場所でノゾムは、自分と同い年の少年と仲良くなった。だが、自分は何の関係も無いのに対し、少年は１０歳で戦場に駆り立てられていたが、幼い二人にはそんな違いなど関係は無かった。
ある日、二人が安全地帯で会話を続けている最中、少年の敵軍の生き残りが現れ、その少年を撃ち殺してしまった。
ノゾムは目の前で人が死ぬ姿を初めて見た。
敵の兵はノゾムを見ても、武器を持っていない事から敵とはみなさず、そのまま去っていった。
ノゾムは幼い心にトラウマを持ってしまった。
「確かに苦しい過去だ。だが、それをちゃんと折り合いをつけないと…レンゲルは使いこなせない」
「あぁ、そうかい」
ノゾムが右手を翳すとレンゲルラウザーが現れる。
「でもな…」
それを振り回し…。
ドガアァッ!!!
地面に突き刺した。
その瞬間、景色はガラス細工のように粉々に砕け散る。
「…これは違うんだ!!」
そして創り出された、新たな景色。
ブレイドやギャレン、留美奈たちが戦っているというのに、自分はレンゲルバックルを握り締めて戦おうとはしない。
「ウウウゥッ!?」
スパイダーは、その変化に驚いている。

「兄貴分なのに頼りにならないってのは、結構つらいんだよな…。でもおまえを倒せば、もう足は引っ張らない！シマノさんよ、力貸してくれ！」
「…あぁ」
シマノはタランチュラへと変化し、ノゾムはレンゲルラウザーを構える。

そして…。

あれからレンゲルは立ち尽くしている。
ギャレンはそれを見つめ続けていた。
「ノゾムさん…」
ふと、レンゲルの右手の人差し指がピクリと動く。その手はレンゲルバックルへと伸び、閉じた。
オリハルコンエレメントが現れて、レンゲルの変身は解除されたため、ノゾムの姿に戻った。
彼が自分から変身を解除したのは初めてだ。
「もしかして…！」

「…復活!!」

「セアアアアアァッ!!」
ズバッ！
「がはぁぁっ！」
ブレイドはイーグルに圧倒されている。
「剣斗！」
「貴様らの思い通りにはさせん！」
救助に向かいたいが、ピーコックに妨害される。
いくら優勢とはいえ、相手は上級アンデッド。彼らの実力では退ける事は出来ない。
イーグルの右手にある爪が、ブレイドを狙う。

「ブレイド…君は完全に邪魔をする者です。ここで…」
「くっ!?」
「死ぬが良い!!」
バン!!
「ウッ!?」
ふと、その切っ先が衝撃によって遮られた。
衝撃の方向を見やると…。
「剣斗さん!・留美奈!・チェルシーさん!」
ギャレンがラウザーを両手で構えて立っていた。痛む右腕を両手で使う事によって、何とか構えているのだ。
そして隣には…。
「真打ち…登場!」
レンゲルバックルとラウズカードをセットしながら笑う、ノゾムの姿。
「ノゾムさん!」
「なぁに心配するな。…見てろ!」
ベルトを装着し、構えて静かに腕を下ろす。
「…変身っ!!」
〈ＯＰＥＮ―ＵＰ〉
紫と金色の入り乱れるオリハルコンエレメントがノゾムの体をすり抜ける。
その姿は仮面ライダーレンゲルとなる。
しかし、それは今までのレンゲルではない。最初のころのような戦いを渇望するような粗暴さは見られず、ましてやカテゴリーＡに支配された邪悪な気配もまるで無い。
真の仮面ライダーレンゲルだ。
「剣斗、立てよ。兄貴分のカッコいいトコロ、見せてやるからなぁっ!!」
「…はい!」
レンゲルラウザーを振りかざし、イーグルとピーコックに攻撃を仕掛ける。

〈ＳＴＡＢ〉
「うらあああああああああっ!!」
「その程度では…!」
イーグルがレンゲルラウザーを避け、反撃に出ようとするが…。
〈ＴＨＵＮＤＥＲ〉
「はぁっ!!」
バリィッ!
「ウオォッ!?」
上空に浮くことでできた隙を突き、ブレイドがサンダーの力でイーグルを再び地面に叩き落とす。
「グウゥ…!」
「ふんっ!」
ドガアアアアアアッ!!
「グガアアァッ!?」
ふらつきながら立ち上がったイーグルをレンゲルラウザーで突く。その衝撃で彼は地面を転がる。
さらにピーコックは…。
「ウオオオォッ!!」
羽の刃を駆使して、留美奈たちに攻撃を仕掛けるが…。
〈ＳＣＯＲＰＥ〉
「たあああっ!!」
ギャレンがスコープバットの力で命中精度を高め、それらを全て打ち落としていく。
その攻撃が止むと同時に…。
「「はぁっ!!」」
ドガアアアッ!!ズバァッ!!
留美奈とチェルシーが小鳥丸と拳を振りかざし、ピーコックに突きたてた。
「グウゥアアアァ!!」
たまらず彼は呻く。
「同時攻撃だ!!」

ブレイドの合図で、全員が攻撃態勢に入る。
〈ＫＩＣＫ〉〈ＤＲＯＰ〉〈ＢＩＴＥ〉
更に留美奈とチェルシーも自身の能力を最大限に引き出し、走り始める。
「おおおおおおおぉっ!!」「たあああああああぁっ!!」「どらああああああぁっ!!」
「はあぁっ!!」「せああああぁっ!!」
ドガアアアアアアアァッ!!!
「ウアアアアアアアアアァッ!!!!」
上級アンデッドとは言えど、その攻撃には溜まらず吹き飛んだ。
彼らの体からは火花が散っており、攻撃の強大さを物語っている。
「ここは、引きましょう」「くそが…!!」
「待て!!」
しかし、ここで封印されるわけには行かないのか、２人は翼を広げ何処かへ飛び去った。
追いかけるも、その姿は見つからなかった。

戦いから戻ってきた５人をルリが留美奈の家で迎え、ノゾムが彼らにカテゴリーＫ「エボリューションタランチュラ」を見せた。
「これ…」
「シマノさんだ。おれに敢えて封印される事で、内側からカテゴリーＡの闇を消し去ってくれた」
「そうですか…」
彼らは目を伏せる。
「あぁ、最後にこう言ってた」

スパイダーを倒し終えたとき、ノゾムにシマノは伝えた。
「ノゾム君、彼らに責任を感じたり、悲しむような事があれば、どうか自分を責めないでと言ってくれ。ここが…俺の在るべき場所、収まるべきところに収まっただけだ。残りの戦友達も俺と同じように、在るべき場所に返してやってくれ」

「…あぁ」
その言葉の後、ノゾムは意識を取り戻したのだ。
「おれ達に出来るのは、シマノさんの言葉を忘れずに精一杯戦うことだ。良いな？」
ノゾムの言葉に誰もが頷いた。
「さてと、剣斗。家は？」
「は？」
「おいおい、先輩が家無しなんて、そんな話は無いよな？」
剣斗は小さいながらアパートの一室を借りて一人暮らしをしている。ノゾムは基本的に世界中を旅しているため、住居を持っていない。
ＢＯＡＲＤ借り上げのマンションもあるが、離反している以上は利用でいない。
彼の予感は嫌な方向へ向かう。
「ちょっと待ってください！あの家は一人が限界です！」
「そう言うな！ケン坊・ノゾムンの仲だろ？」
「イヤですよ！絶対！」
剣斗はブルースペイダーに跨り、逃げた。
「バカめ、おまえの家は知ってるんだよ！」
彼が指を鳴らすと何処からかグリンクローバーが現れ、それに跨って追いかけた。
留美奈たちはその一部始終をあきれながらも微笑ましく見つめていた。

カリスはラウズカードの束を見つめる。
３、４、５、６、７、８、９、１０、Ｊ、Ｋ。
１１枚のカードがある。Ａのカードは変身に使っており、Ｑは未だ封印していない。
「あと…１枚…」

続く…。

次回！

新開発の強化システムだ

人間とは…不思議ですね

第８話「可能性の力」

今、その力が全開する…！

ラウズアブゾーバー…

カテゴリーＪは強い…！

第８話「可能性の力」

ノゾムがレンゲルの力をコントロールできた事によって、剣斗たちに大きな戦力が増えた。
剣斗自身は、まだＢＯＡＲＤが何か隠し玉があるかもしれないというが、ブレイド、ギャレン、レンゲルの３人のライダーがいれば、とりあえず不安はないだろう。
一週間が過ぎたが、イサカ達やＢＯＡＲＤも大きな動きを見せなかった。故にひと時の平和を謳歌する事が出来た。
そんな中、剣斗は自宅前の駐車場で竹刀を振るっている。常に鍛錬を積み重ね戦いに備える事が、世界に平和をもたらすための道につながるのだと信じて。
それに付き合うものたちがいた。
今回の件で仲間となった留美奈である。
「留美奈、おまえは十分といえるほど強いだろう。能力者だから当然のことではあるがな。…だが」
「…なんだよ」
剣斗の鋭い瞳は、留美奈の幼さが残る少年らしい瞳をまるで焼くかのように捉える。
「今までの戦いぶりを見ている限り、おまえ自身の強さを感じられない。特異な能力に頼りきりだ」
「なんだと…!?」
留美奈は感情を高ぶらせた。それはルリを守るため、仲間と生き抜くために培った自分の力を「無駄」と吐き捨てられたようなものだ。
「聞いた話、おまえの能力はルリの「反魂の力」によって生み出されたそうだな？」
「…あぁ」
「結局、それは他者から譲り受けた力だ。おまえ自身の力じゃない」
留美奈は歯軋りして下を向く。剣斗はその姿を見て、小さくため息をついた。

「図星だな」
「…でもおまえや銀之助だって、ブレイドやギャレンの力は自分自身の力とはいえないだろ！」
　自分の持つ竹刀を剣斗に向けて、訴えかける。
「…なら、かかって来い。能力を使わずにおれに一本でも取れれば、おまえが正しいと認める。もちろん、おれもブレイドには変身しない。武器は両者とも竹刀と肉体、条件は同じだ」
　ブレイラウザーの構えと同じ動きで、竹刀を構える剣斗。
　二人のやり取りを見ていた、ルリ、チェルシー、銀之助、ノゾム。
　ルリはふと、不可解なことに気づいた。
「…銀之助さんには何も言いませんでしたね。留美奈さんの方が、腕っ節は強いのに」
　たしかにギャレンの力を除けば、銀之助もあまり実力者とは言えない。アンダーグラウンドでの戦いを経て幾分か強くはなったが、まだ留美奈の方が上だ。
「なんか、ルリさんに遠まわしの攻撃を受けた気が…」
「あ、ごめんなさい、そういうつもりじゃなくて…」
　落胆する銀之助に、困ったような表情で謝るルリ。その間に入って、ノゾムが呟く。
「留美奈と比べて、おれ、剣斗、銀之助、チェルシーには、一つ大きな違いがある」
「わたし達との違い…？」
　チェルシーには、まず後者４人の共通項が浮かばなかった。仮面ライダーならばチェルシーは除外、能力者はその逆、生身の実力も銀之助が留美奈より下だ。
「ま、おまえさん達も見ながら気づきなさいな。分かれば１００点満点！」
「なんなのよ、全く…」
　チェルシーはノゾムのふざけた態度にあきれながら、再び視線を二人に戻した。
　先手は留美奈だ。

「はあぁっ！」
彼は剣道を祖父から無理やり叩き込まれている。故に竹刀捌きには自信がある。
だが、剣斗もそうだ。ブレイドの主となる武器は剣型となる「ブレイラウザー」。そのために今まであらゆる刀の使い方、あらゆる太刀筋を学んできた。そして鍛え抜かれたしなやかな肉体が創り出す、稲妻の閃光のごとき素早さで…。
「おおおぉっ!!」
バシィン!!
「うっ!?」
留美奈の竹刀を弾き飛ばした。留美奈の握力では、剣斗の竹刀の一撃を受け止めきることは出来なかった。
とっさに地面に落ちた竹刀を留美奈が手に取ろうとかがんだ瞬間、目の前を剣斗の竹刀が右から風を切って現れる。
「…勝負ありだな」
「そんな…早すぎる…」
ブレイドとして戦い続ける剣斗に対して、留美奈は戦いを終えてから彼と出会うまで戦う事がなかった。つまり、鈍っているのだ。
「言っておくが、おれも実力があるほうじゃない。それでおれに負けるってことが…どういうことかわかるだろう?」
そう言って向けていた竹刀を引き、剣斗は踵を返して歩き去る。
彼が留美奈を鍛えさせようと考えた理由は、現在の状況からだ。
たしかに、今の常用で戦力は十分だろう。だが、個々のライダーの持つ力が不安定すぎる。
ノゾムは下手をすればアンデッドに支配されかねない。剣斗と銀之助はその心配はないが、実力が伴っていない。故に戦えない状況に陥る事も考えられるだろう。
そうなった場合、留美奈とチェルシーだけが戦えるのだ。中でも、とある理由で留美奈を鍛えるべきと剣斗は考えたのだ。
剣斗は彼らと少し離れて、ある雑木林の中に来た。

「おれは…」
正直に言えば、彼らと共に過ごす時間を戦いの事だけにしたくはない。
彼らと関わる事で、戦いを終わらせた先にある生活というものを見出せた気がする。
戦いの先にあると望むのは「平和」。その平和になったとして、自分は何をしていけば良いのか。
それが少しだけ見えた気がした。
「久しぶりだね、剣斗君」
声に振り返ると、天王寺が立っている。
「天王寺…！」
彼はルリを利用して実験を企てていた。現在の自分の敵に等しい。
「そう怒らないでくれたまえ。私はあくまでも「繁栄」を望んでいるんだ」
「そのために、ルリを利用するのか？」
「私も試行錯誤しているのだよ」
この会話の中、天王寺は表情を全く変えずに淡々と会話を続けていた。
「…とは言うもののアンデッドの封印という作業は、選ばれた仮面ライダーにしか出来ない。そこでだ」
おもむろに懐から２つの機械を取り出し、それを剣斗に投げ渡した。
「これは…？」
「ラウズアブゾーバー、新開発の強化システムだよ」
質問の答えを聞いた後、ラウズアブゾーバーをもう一度だけ見つめる。
「それはカテゴリーＱによって起動し、カテゴリーＪまたはカテゴリーＫによって効果を発揮する。その力は絶大であると予測できる」
視線が離れた後も、天王寺は淡々と説明を続けた。
彼の元で活動しているときも感じていたが、彼に感情というものを感じられない。それを抑制しているというよりは、欠落して元より無

いように感じた。
「ただ…起動後はさらに適合率と身体能力が必要になる。だから…テストさせてもらおう」
その言葉で天王寺を見ると、彼の周辺にはメカローチの大群がうごめいていた。
何をしようとしているのかは理解できる。
「ざっと２０体。一人で討伐するのは骨が折れるよ。さぁ、やるかな？」
要は腕試しだ。メカローチはアンデッドの細胞を機械の核に組み込み、劣化しているアンデッドを再現している。封印せずとも機能停止するし、固体の力は高くない。
数で戦うメカローチたちを殲滅できるかというものだ。
「…無論！」
その言葉の直後、剣斗の腰にはブレイバックルが装着されていた。
「変身っ!!」
〈ＴＵＲＮ―ＵＰ〉
オリハルコンエレメントをくぐり、ブレイドへと変化する。
「来い!!」
その言葉が合図となり、メカローチたちは一斉にブレイドに群がるように襲い掛かった。

留美奈はあの後、ずっと竹刀を振るい続けていた。
何が足りない？どうすれば、彼と同等に戦える？
その答えが分からなかった。
休まず振るい続けたために、その手には血豆ができ、それが潰れて竹刀の柄の部分を赤く染めていた。
「留美奈さん、もうそろそろ休まないと…」
「でも…答えがよ…！」
カランッ！
ルリに止められ、彼は悔しそうに竹刀を地面に叩きつけた。
これだけやっても理由が分からない。

「おまえぇ…ぶっきようだなぁ～！」
「な、なんだと!?」
見かねたノゾムが、留美奈の肩を叩きながらおかしそうに笑う。
「あのな、さっきの剣斗の言葉を聞いて強くなれば良いと思うか？」
その言葉で、首をかしげた。剣斗の言葉は、まるで留美奈が弱いかのような発言をしていた。それを覆したくて竹刀を振るい続けた。
だが、剣斗の真意はそうでない。なにしろ、自分自身が強いと発言していない。
「じゃあ、どう言う…」
「それを考えるのが、この特訓だ！鍛えるってのはな、なにも筋力を高めたり、技術を磨くだけじゃないんだってことだ。これがヒント！」
「じゃあ…一体…」

「はぁっ!!」
ズバアアァッ！
ブレイラウザーが唸りを上げ、メカローチを蹴散らしていく。
少しずつだが、その数は徐々に減っていく。
だが、それと同時に…。
「はぁっ…はぁっ…ちぃっ…！」
体力も減っていく。剣斗の致命的な欠点は耐久力が低い事だ。短距離型というべきか。
短時間の間で全力を出し切り、すぐにバテが来てしまうことなのだ。
ブレイドになることでそれは軽減しているのだが、変身者の身体能力もダイレクトに反映される。
おそらく、留美奈よりも早くバテがくるのだろう。
「どうやら…まだ耐久力の課題は克服できていないようだね」
「黙れ…！」
自分の弱点を指摘されると、敵味方問わずに気分は良くない。特に天王寺は無表情ながらも嘲笑しているような雰囲気もあるため、ブレイドは苛立ちを隠せない。

「そこも未熟だね」
ドガァッ！
「っ!?」
そういわれるや否や、メカローチが背中を切り裂いてきた。
その衝撃に地面を転がるブレイド。
「心が乱れると、集中力が途切れる。戦士とは常に冷静であるべきだ」

留美奈は一人で残り、竹刀を見つめる。
今は振り回したりはしていないが、これを見つめていると答えが見出せそうな気がした」からだ。
「力や技術じゃないとしたら…」
それ以外に戦いに影響するもの…。

「人間という生命体は、高等な存在だ」

声に振り向くと、そこにはカリスがいた。
「カリス…!」
未だ正体の知れない仮面ライダーを名乗る、謎の存在。その手にはカリスアローがないことから戦う意思はないらしい。
「人間は他の生物には持ちえないモノがある」
その言葉に気づいた。
「…心!!」
体に身につける以外の鍛える方法ならば、それしかない。
「人間は本調子を維持するために、精神や心を研ぎ澄ます。これは本能だけで生きている生物には成せない鍛錬だ」
「でも…心を鍛えるっていっても…」
たしかに、心を鍛えるというのは並大抵の鍛錬とは違う。留美奈も全くやってこなかった鍛錬だ。
「後は、オマエが何に気づくかだ…」
留美奈は…自分の手を見つめ…。

未だにメカローチは3分の1を残している。しかし、ブレイドはもう立ち上がれない。ブレイラウザーを地面につきたてて座り込んでいる。
「くっそ…！」
「ふむ…まだ融合係数が足りないようだね。アンデッドと融合すれば、まだ疲労感は消えるはずだ」
そう、アンデッドは不死生物。故に身体能力も高い。そのアンデッドと融合する事を前提に作られたライダーシステムを装着したのならば、装着者の疲労や苦痛は生身と比べても全く違うはずだ。
だが剣斗は筋力等に関しては上がっているものの、耐久力は未だに低い。おそらくはカテゴリーAとの融合係数が低いのだろう。
「その程度ではラウズアブゾーバーは使えない。君はここまでかな？」
天王寺がそう言うと、メカローチが一斉に襲い掛かってくる。
…負けた。
そうあきらめた瞬間。
ザァッ!!!
強い風が吹き荒れ、メカローチが吹き飛ばされた。おかげでブレイドは難を逃れた。
「これは…!?」
振り返ると、留美奈が小鳥丸を構えて立っていた。
「剣斗！ようやく分かった！」
ブレイドに走りより、彼を立ち上がらせる。
「浅葱留美奈…」
「おれの力は他者から「望まずに与えられた物」だったってことだろ？」
彼は答えを見つけているのだろうか。ブレイドは彼の言葉のその先を聞きたかった。
「つまり…？」
「この力を、しっかりと自分のモノにしろってことだ！」
「…合格だ！」

安心した。彼なら、背中を預けて戦えそうだ。
「そういや、剣斗は大丈夫なのか？」
「さっきまで、大丈夫じゃなかったがな。今なら戦えそうだ！」
先ほどまでの疲労が幾分か解消されている。それでも体は重いが、戦うには十分といえるだろう。
「はあああぁっ!!」
二人は一斉に駆け出す。
留美奈の風の刃はメカローチを真っ二つに切り裂き、ブレイドのブレイラウザーは雷を纏い、メカローチを原型が残らないほど黒焦げにした。
「ほう…この短時間で僅かに融合係数が上がるか…。意思との繋がりがありそうだな」
その光景を感動もなく見つめていた天王寺。ただ、自分が知りえなかった事を知り、それを整理していた。
程なくして、メカローチは完全に殲滅した。
「どうだ…！」「次はあんたがやるか!?」
二人が切っ先を天王寺に向ける。しかし、驚く事も怯える事もしない。
ただ微動だにせず、それを見ていた。
「…その調子でアンデッドを封印してくれたまえ」
そう言いながら、踵を返して歩き去った。
「まてっ！」
留美奈が追おうと駆けるが、天王寺は近くの木を通り過ぎた瞬間、まるで手品師のマジックのように姿は忽然と消えていた。

それから、剣斗と留美奈は仲間達の待つ場所に戻った。
「随分掛かったな」「剣斗さん…傷だらけじゃないですか!!」
ルリと銀之助は剣斗の背中を押し、手当てを始めた。
「そうだ、五十鈴銀之助。おまえにこれを」
そう言って、剣斗は銀之助にラウズアブゾーバーを渡した。
「これは…？」

「戦利品だ。近いうちに説明する」
銀之助はルリに手当てをまかせ、訝しげにラウズアブゾーバーを見つめていた。
残ったチェルシーとノゾムは、留美奈に結果を聞いていた。
「安心しろ！課題は合格だ！」
ニッと笑い、剣斗を見つめる。その視線に気づいた剣斗は、僅かに笑みを見せていた。

続く…。

次回！
僕が相手だ！
その力！
諦めない！絶対に！
がそれだから！

第9話「今の精一杯」
今、その力が全開する…！

人間め…
見せてみろ、
僕にできること